

中国社会科学院に想う	1
2018(平成30)年度「指定研究」等研究経過報告	2
2019(令和元)年度「指定一般研究」研究組織一覧(追加)	8
2019(令和元)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	9
2018(平成30)年度「一般研究」研究成果概要	11
海外学会参加・研究調査報告	27
国内学会参加・研究調査報告	35
獣医抄ワークショップ開催報告	38
公開講演会・公開研究会	40
東京分室 PD 研究員個人研究成果概要	44
彙報	47

研究所報

中国社会科学院に想う

研究・国際交流担当副学長 真宗総合研究所長 浦山 あゆみ

昨年9月に北京へ出張した。真宗総合研究所と中国社会科学院古代史研究所の調印式に出席するためである。スモッグで霞んでいた数年前とは異なり、澄んだ紺碧が出迎えてくれた。ちょうど中秋節の時期であり、懇談を終えて夜空をふと見上げると、円い月が浮かんでいた。円満な交流を祝福してくれるように。

中国社会科学院には今回初めて訪問したが、実は以前に何度か近くまで来たことがある。北側にある四川料理レストランの口水鶏というメニューが比類をみない絶品で、暇を見つけては通った。食事ついでに周辺を散策するのも楽しみの一つであった。中国社会科学院のすぐ隣にある切手博物館はとりわけ大好きな場所で、1日中居ても退屈しないだろうと思う。ここには中国のあらゆる切手が展示されており、そのバラエティに富む絵のデザインと色や形の多さは圧巻である。小さな切手の1つ1つを覗いていると、つい時が経つのを忘れてしまう。切手以外にも昔の封筒や手紙が展示されていて、更に好奇心を掻き立てられ、頭の中はいつの間にか時空を超えている。

そもそも中国の封筒や手紙に興味をもったのは大学院生の頃、ふとしたことから1通の封書を手に入れたことに始まる。中には手紙と「光緒拾壹年陸月 憲課 許克勤」と書かれた科挙の受験票らしきものも入っていた。許克勤、字は澡身、号は勉夫または勉父(甫)といい、浙江海寧の人。光緒11年は1885年であるから100年以上前になる。中に入っていた手紙は原稿用紙に墨書されており、版心には「學古堂日記」とある。許克勤撰の『読周易日記』一卷が『學古堂日記』の中に収められているから、手紙の差出人である弟子の陳濂はどうやら編纂のお手伝いをしていたらしい。学古堂は光緒14年に黄彭年が創った学堂で、現在の蘇州図書館の前身でもある。滄浪亭という庭園の北側にある可園の中に設けられていた。風雅な庭園でどのような講義が行われていたのだろうか。

封筒の表書は「内洋五元外書箱一只送壽星橋東堍

呈 許勉夫老爺」となっている。手紙以外にも銀貨が同封されていたようだが、残念なことになっていなかった。もし入っていたら、どのぐらいの価値になるのか。そもそも当時の貨幣制度はどうなっていたのかもよく分からない。「壽星橋東堍」とある「堍」字は、橋のたもとという意味である。蘇州は東洋のベニスと称される水郷地帯で、たくさんの運河が張り巡らされているため、橋の数もかなり多い。壽星橋は姑蘇城内に架かるアーチ状の石橋で、南宋の頃には既に存在し、今も蘇州に確認できる。長い年月のうちに何度か改修され、現在は蘇州市文物保護単位に指定されている。

蘇州の橋といえば最も有名なのは寒山寺の前にある楓橋で、小商橋・盧溝橋・双龍橋と並んで、切手のアーチ橋シリーズに選ばれている。展示された4枚の切手を見比べてみると、他の橋よりもアーチの勾配が急な特徴が上手く描かれている。この楓橋の名を高からしめたのは盛唐の詩人張継であろう。

月落烏啼霜滿天	月落ち烏啼きて	霜天に満つ
江楓漁火對愁眠	江楓 漁火	愁眠に對す
姑蘇城外寒山寺	姑蘇城外	寒山寺
夜半鐘聲到客船	夜半の鐘聲	客船に到る

賑やかな寒山寺の境内ではあまりによく目にする詩なので鼻につくが、静かな博物館では薄暗さと相まって、存分に詩境に浸ることができる。日本でも江戸時代から人口に膾炙するこの詩を、北京の、しかも切手博物館で思い出したのは意外であった。

残念ながら今回は切手博物館を参観する時間はなかったが、懐かしみながら記したこの所報が手元に届くのは、霜天に満つ頃と聞く。多くの人が春節を迎えようと集う寒山寺の除夜の鐘声を想いつつ、各研究班や諸先生方の研究状況を拝読しようと思う。

2018 (平成 30) 年度「指定研究」等研究経過報告

新しい時代における寺院のあり方研究

現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果たし得る役割についての研究

研究代表者・学長 木越 康
(真宗学)

本研究は、人口減少や地域構成員相互における関係性の稀薄化等の深刻な問題を抱える現代の地域社会において、寺院の果たし得る役割について研究し、その成果を公開しようとするものである。

3か年の計画のうち2年目にあたる本年度の活動は以下の通りである。

①調査対象地域における調査の実施：昨年度に引き続き岐阜県揖斐川町春日地区において地域及び寺院対象の調査を実施した（現地調査計12回、電話による調査1回）。本年度は、特に寺院調査において、他地域に移住している寺院門徒への聞き取り調査を加えて行った。昨年度と同様、地域・寺院の厳しい状況が浮かび上がり、そうした状況が多様で複雑な問題を内包していることが確認された。しかし、やはりこれも昨年度の調査と同様、そうした厳しい状況のもと、地域と寺院が密接に関わる形での諸活動が歴史的背景に裏づけられた形で地道に行われ続けている点を確認できた。

②学外講師による研究会の開催：本研究班と共通する問題関心・研究課題を持つ研究者を招き、研究会を5月、7月、1月の計3回開催した。

③日本宗教学会第77回学術大会でのパネル発表：2018年9月に開催された同大会において、「人口減少社会における地域と寺院のあり方研究」のテーマで研究員及び学外研究者によるパネル発表を行った。過疎地域における問題が多様である点、他出子に注目することや、生者にとどまらず死者をも含めた人間の関係性に注目することが重要である点などが確認された。

④研究論文の公開：上記の調査・活動から得られた知見を整理・公開するため、「中山間地域に立地する真宗寺院の現状と課題－人口動態と他出子対応の視点から－」と題する研究論文を研究員・研究補助員の共著により執筆した。一連の調査を通じて明らかになった、当該地域の人口減少・高齢化が深刻である点、比較的近距离に居住する他出子世帯が多く存在するとい

う特徴を有している点、これらの状況が寺院運営に大きく影響を及ぼしている、また今後も及ぼすであろう点などを具体的に述べた。

⑤以上の活動の外、石川県七尾市で行われた超宗派の共同調査への参加報告会を1回、研究課題の明確化や調査実施に際しての具体的な手法の確認、調査結果の分析等を行うミーティングを計17回実施した。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・講師 Michael J. Conway
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。2018年度は英米班、東アジア班の二班の体制で研究を進め、それぞれ下記のような研究テーマで活動している。

〈研究テーマ〉

- ①英米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。
- ②東アジア班：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院歴史研究所との共同研究を行う。

活動内容

〈英米班〉

①国際学会への参加

1) ヨーロッパ宗教学会 (EASR) 第16回学術大会 (2018年6月17日(日)～6月21日(木)、スイスのベルン大学)

ロバート・ローズ研究員、マイケル・バイ囑託研究員 (マーブルグ大学名誉教授) が「Multiple Religious Identities in Japan」と題するパネルで発表を行った。

2) エトヴェシ・ロラランド大学 (ELTE) と共催の第3回国際仏教シンポジウム (2018年9月17日(月)～18日(火)、ハンガリーのエトヴェシ・ロララン

ド大学)

以下の通りで本学教員の6名が研究発表および講演を行った。

木越康教授(真宗学)「Recent Trends Concerning the Issue of 'Buddhism and Practice' in Contemporary Japan」(日本における「仏教と実践」という課題についての近年の動向)(基調講演)

ロバート・ローズ 研究員「Can Arhats Attain Buddhahood? An Issue in the Interpretation of the *Lotus Sūtra*」(阿羅漢は成仏できるのか-『法華経』解釈の一つの問題について-)

井上尚実 嘱託研究員「Problems in "Transfer of Merit" as Buddhist Practice」(仏教の行としての「回向」の諸問題)

藤元雅文 准教授(真宗学)「Shinran's "Practice": The Shin Buddhist Shift in the Buddhist Understanding of Practice」(親鸞における「行」-「行」理解における真宗(他力)的転回-)

上野牧生 講師(仏教学)「On the Listening to Buddha's Words with Reverence: The Very First Step of Buddhist Practice in Vasubandhu's *Vyākhyāyukti*」(敬意をもって仏の言葉を聞くことについて-世親の『釈軌論』における仏教修行の第一歩-)

マイケル・コンウェイ 研究員「Practice and Other Power in Daochuo's Pure Land Buddhism」(道綽の浄土教における行と他力)

②真宗関係の翻訳研究

1)『歎異抄』翻訳研究プロジェクト

大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定が締結され、合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献(講録等)を英訳研究するプロジェクトが立ち上がった。今後5年間の予定で年2回(3月にバークレー、6月に京都で1回ずつ)合同ワークショップを開催し、最終的に2冊の研究書(注釈付き本文英訳+研究論文集)の出版を目標とする。その第4回ワークショップは2018年6月22日(金)から24日(日)に龍谷大学で開催された。そして第5回ワークショップは2019年3月1日(金)から3日(日)にカリフォルニア大学バークレー校の主催でバークレー市の浄土真宗センターにて開催された。研究員および本学の大学院生が参加した。

2) 教師課程教科書『宗門の歩み』英訳出版

本研究班の研究員の協力を得て、阿満道尋 嘱託研究員を中心に進めてきた『宗門の歩み』英訳は真宗

大谷派北米開教区真宗センターから出版された。

③国際シンポジウムの成果出版

1) 真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムの成果出版

2015年6月26日(金)、27日(土)の2日間、大谷大学で *Cultivating Spirituality* 出版(SUNY, 2011)を記念して開催されたシンポジウムの成果を、マーク・L・プラム教授(嘱託研究員)とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集により欧米の大学出版から出版する予定で編集作業を進めた。具体的にコンウェイ研究員とウエイン横山 嘱託研究員が定期的に真宗総合研究所内で編集作業に取り組んだ。

2) エトヴェシ・ローランド大学(ELTE)と共催の第2回国際仏教シンポジウムの成果出版

2016年5月26日(木)、27日(金)の2日間ハンガリーのELTE 東アジア研究所の共催により、「仏陀の言葉とその解釈」というテーマで開催した第2回共同シンポジウムの成果を、ELTEのハマル・イムレ教授と井上尚実 嘱託研究員の共編で、出版するために、井上 嘱託研究員が編集校正作業を進めた。

④The Eastern Buddhist Society 東方仏教徒協会(EBS)の事業

昨年度の移管に伴う体制の整備を行ない、英文学術誌 *The Eastern Buddhist* の編集・出版過程の効率化に向けて編集体制の充実を図った。なお、2018年9月8日(土)に本学で開催された日本宗教学会にてEBSの将来の編集方針等についてパネル発表を行い、多くの参加者から今後の方向性について貴重な提言を得た。なお、*The Eastern Buddhist* 誌は8月に Vol.47 No.1 を、2月に Vol.47 No.2 をそれぞれ刊行した。

⑤公開講演会の開催

2018年8月7日(火)に日片祥子氏(ハーバード大学南アジア学科ポストドック研究員・チベット語講師)を講師として招き、「チベット仏教史-サキヤ派系譜を中心として-」という題名のもと、公開講演会を開催した。

2018年11月14日(水)にヨーン・ボルプ氏(オーストリア大学准教授)を講師として招き、「Japanese Buddhism in Europe」(ヨーロッパにおける日本仏教について)という題のもと、公開講演会を開催した。

⑥真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理

本学の図書館における電子ジャーナル購読と研究所における紙媒体での購読の重複を避けるために調査を行い、購読雑誌の整理をした。

〈東アジア班〉

I. 研究会

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動として2回の研究会を開催し、中国における宗教と文化に関する研究活動として2回の研究会を開催した。

(1) 中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、同研究所より4名の研究者を招聘し、2018年12月14日(金)に響流館4階真宗総合研究所ミーティングルームにおいて公開研究会を実施した。報告者および報告タイトルは以下の通りである。楊宝玉氏(中国社会科学院歴史研究所文化史研究室、研究員)「“江南の遠客蹤り、翹思するも未だ還るを得ず”-晩唐期に西陲の敦煌に滞在した江南の文士」、烏雲高娃氏(中国社会科学院歴史研究所中外関係史研究室副主任、研究員)「多言語テキストに見る元代の駅と訳」、陳時龍氏(中国社会科学院歴史研究所明史研究室副主任、研究員)「聖諭六条と明清時代の基層教化」、孫靖国氏(中国社会科学院歴史研究所歴史地理研究室副主任、副研究員)「清代初期地図史引論」。

(2) 2018年12月15日(土)に、東アジアにおける宗教と文化に関する研究活動の一環として、戦中期における真宗大谷派の琉球布教に関する公開研究会を開催した。報告者は川邊雄大氏(二松学舎大学)、報告タイトルは「明治期琉球における真宗法難事件-小栗憲一を例として-」である。

(3) 2019年2月15日(金)に、戦中期における日本の仏教者および仏教史学者によって行われた中国仏教史跡調査に関する公開研究会を開催した。報告者は藤井由紀子氏(同朋大学仏教文化研究所)、報告タイトルは「日中戦争下の学術調査と仏教-新出の『小川貫式資料』を中心として-」である。

(4) 中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、2019年3月3日(日)より3月7日(木)の間、浅見直一郎教授と岩本真利絵任期制助教を特別招聘者として派遣し、同月5日(火)に中国社会科学院歴史研究所において研究報告を行った。報告者と報告タイトルは以下の通りである。浅見直一郎氏「4~7世紀の日本における中国文化の受容-最近の研究を中心として-」、岩本真利絵氏「管志道の思想形成と政治的立場-万暦五年張居正奪情問題とその後-」。

西藏文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

1. チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

今年度は、2007~2015年度の間借用し整理・研究を進めていた富山県城端の宗林寺所蔵の寺本婉雅(1872-1940)旧蔵チベット語文献中、ケンチェン・パンディタ=イエシェー・ベルデン『ホルの地に王統と仏教・仏教の保持者・文字の創始・寺院などがいかに現れたのかを説く「宝の数珠」(1835年著作)の出版に向けた研究を行なった。本文献にはモンゴル語版があり、『エルデニーン・エリヘ』の名で知られている。今後のより詳細な対照研究に資するため、チベット語テキスト中に、コペンハーゲン王室図書館所蔵『エルデニーン・エリヘ』写本の該当する箇所を葉数を記入した。合わせて、チベット語テキストの見直し・校正を行なった。

この他に、本学図書館所蔵のチベット語文献のうち蔵外13940『極楽に生まれるボワ(遷移)と犯戒還浄など』というウメー書体写本の研究に着手した。また、『ブトン仏教史』第1章仏教概説の部分の邦訳研究を行った。

2. モンゴル国立大学との共同研究

モンゴル国立大学総合科学部哲学・宗教学科のS. デムベレル講師を招き、6月29日(金)には同氏を講師として「モンゴルで新たに発見されたチベット語仏教文献」のテーマのもと、公開講演会を開催した(『所報』No.73, p.37参照)。また、8月18日(土)~25日(土)にはモンゴル国において、遺跡のドローン撮影と碑文の3D撮影を行なった(『所報』No.73, p.26参照)。

3. 海外の研究者・研究機関との交流

4月27日(金)に中国蔵学中心図書資料室館員ソナム・ドルジェ氏を招き、「清代(17~20世紀初頭)到北京で開版されたチベット語文献とチベット古文書の保護について」とのテーマで公開講演会を開催した(『所報』No.73, p.36参照)。

2018年10月には本学と中国蔵学研究中心の間で「学術交流に関する協定書」が締結された。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー宗教 研究院との共同研究

研究代表者・教授 織田 顕祐
(仏教学)

当研究班は、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された「学术交流に関する協定」に基づき共同研究を推進するものである。調査・研究協力の他、将来に向けての研究者育成といったベトナム側からの要請に応じて、相互学術的交流を行うものである。年度当初に研究目的として掲げた点に従って2018年度の経過を報告する。

1. 『ベトナム仏教概説』の日本語訳を進める

これまで当該研究は、ベトナム宗教研究院のゲン・クオック・トゥアン旧院長が中心になって準備が進められてきた。ほぼ半分を執筆・翻訳した段階で執筆担当者の病氣療養により一旦中断していたが、結局治療の効果が上がらず2019年2月8日(金)にご本人は急逝された。そのため、当該研究は仕切り直す必要が生じた。年度末の宗教研究院訪問において、既に出上がっている原稿に基づき、2019年末までに宗教研究院において分担執筆して完成することを確認した。

2. 『日本仏教概説』のベトナム語訳を進める

現在のベトナムでは、学術的なレベルで日本語-ベトナム語を使用できる研究者は極めて少ない。ハノイ国家大学付属人文科学大学准教授のPham Thi Thu Giang氏はそのうちの1人である。氏は日本に留学し日本仏教の分野で博士の学位を取得した現代ベトナムを代表する若手の俊秀である。同氏はこれまでに、いくつかの日本語の書物をベトナム語に翻訳し出版している実績を有しており、日本語の書物をベトナムに紹介する際の一定のノウハウをお持ちであることを確認した。こうした氏の協力によって次年度中に翻訳・出版が可能であるとの見通しを得た。

3. 現地フィールドワーク

今年度は現地フィールドワークを2019年2月26日(火)～3月5日(火)にかけて実施した。詳細はすでに『研究所報』74号で報告したので省略する。

4. ベトナム仏教関係資料の解説研究の実施

『禅苑集英』の解説研究会を毎月二回のペースで実施した。当該書はベトナム北部地域の禅宗の伝統を伝えるものである。次第にその内容が明らかになってきたが、当該書は客観的な歴史的記述ではなく、当該時代の仏教史観を表現するような意味を持った書物であ

る。こうした視点を明確にすることによって、当該書を公開する意義もはっきりすると考えられる。なお、2018年12月13日(木)に、かねてから『禅苑集英』の研究に邁進されてきた明治大学の佐野愛子氏の講演が実現し、いくつかの新しい情報を得た。

5. 現地における「日本語・日本研究、東アジア・仏教研究」の現状把握

前年出会ったフエ報国寺の釈福田(Tran Quoc Phuong)氏を囑託研究員に迎えた。同氏の参加によって北部とは異なるベトナム中部の仏教受容にも視野を広げたい。

6. ベトナム関係文献資料の収集

新たにベトナム民俗信仰や地誌に関するもの数点を収集したが、詳細は割愛する。

清沢満之研究

『清沢満之全集』 別巻の編纂と思想研究

研究代表者・講師 西本 祐攝
(真宗学)

本研究は、大谷大学編『清沢満之全集』(全9巻、岩波書店、2002-3、以下『全集』)別巻の刊行を研究目的としている。

『全集』刊行後、清沢満之研究は新たな展開をみせており、その中で『全集』未収録文献の情報が寄せられてきた。本研究では、新たに清沢満之著述と認めることができる文献を収集・翻刻し、『全集』掲載基準についての精査を行い、2巻分に及ぶ基準を満たす文献を確認するに至った。これらの文献を『全集』別巻1・別巻2として刊行し、清沢満之研究の進展に寄与することを目指している。2018年度は、別巻の編集作業を最優先し、ミーティングを随時行いながら作業を進めた。

①収録文献の編集作業

新たな清沢満之関連の文献を48点収集・翻刻し、うち38点が掲載基準を満たすことを確認している。これらの翻刻・校正作業を行うとともに、校正済の原稿から読み合わせ作業を2班体制で進め、文意確認や注にあげるべき事項の抽出、体裁の調整方針などについて検討した。

②別巻の構成案の確定

これまでの収集文献の内容検討を踏まえ、別巻1・別巻2の構成案を検討した。現在、収集済の文献は『全集』の体裁で2巻分の分量である。既刊『全集』

は各巻をテーマ別に分類し、巻ごとに名称を付したが、別巻は巻ごとの名称を付さず、別巻1・別巻2とし、講義・執筆年代と内容を踏まえ、適切な頁数で区切る案を作成した。

③出張（西方寺・岩波書店）

西方寺（愛知県碧南市）への出張は、以前より、『全集』未収録の清沢著述文献に関する情報を入手していたため、出張調査を名畑直日兄氏（嘱託研究員）に依頼したものである。結果、『全集』収録済の「世界の進み」の続編が『徳風』に掲載されていたことが確認され、これを追加収録することを決定した。岩波書店への出張は、別巻刊行について同社編集部の担当者と交渉した。同社からは、別巻刊行の必要性への理解が示され、年度内に出版費用の見積りの提示、および契約の是非についての報告を確約された。

以上が2018年度の主な活動成果である。2019年度は、編集上の具体的な方針を確定し、年度内における別巻1の刊行を目指す予定である。

大谷大学史資料室

大学史関係史料の収集・整理

室長・教授 阿部 利洋
(社会学)

大谷大学史資料室の主な業務は、年史編纂を目的とした大学に関する史資料の①収集、②整理・保存、③公開である。

①として、図書館には保存されない一時的な刊行物・パンフレット類を収集するとともに、他大学等から寄贈された図書等の目録化や寄贈機関の住所録を作成した。

②については、昨年から引き続き、総務課より依頼を受けた明治32年から昭和27年にかけての入学手続き関係書類の整理を行った。全55点の綴本及びファイル綴史料の調書作成と目録のデータ化を行い、全161点に再分類し、中性紙封筒と中性紙箱への保存作業を順次行っている。加えて、当資料室に保管されているMD・FD・MO・VHS・カセットテープ・フィルム等に収録されている音声や画像データの移行作業を行った。まず、経年劣化等により優先的に保存すべき記録の一覧を作成し、次に、業者に依頼してCDへ移行した上で、HDDに保存した。並行して、資料室内で作業可能なFDについては、別途PCへの保存作業も進めた。

③として、図書館1階エントランスにおいて、2回にわたり大学関係資料の展示を行った。「大谷大学の誕生」展では、1911年の真宗大谷大学設置前後の歴史を紹介した。また、「大谷大学キャンパスの変遷」展では、2018年に慶聞館が竣工されたことを記念し、キャンパスの変遷を写真とともに展示した。

その他、大学史関係資料の保存・公開のノウハウを得るために、全国大学史資料協議会の研究会（全4回）と広島大学文書館研究会に参加（松岡嘱託研究員）し、他大学の学史関連組織や博物館等を訪問した。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブの構築

室長・教授 阿部 利洋
(社会学)

1. パーリ語貝葉写本の研究とデジタル・データ化

デジタル・アーカイブ資料室では、100年余り前のタイ王室より寄贈されたパーリ語貝葉写本（「大谷貝葉」）及びその包み布の包括的な調査をおこなっており、稀覯文献と判明しているものを中心にデジタル画像データ化の作業も進めている。本年度は、以下の作業を実施した。

- (1) 現在までの調査で判明している「大谷貝葉」の稀覯文献の中で、文字の判読が難しい稀覯文献について、現地の専門家の協力を得ながら読解作業・研究を進めるために、タイへ清水洋平・舟橋智哉（ともに当研究班嘱託研究員）の両氏を派遣した（2019年3月7日(木)～15日(金)）。詳細は、『所報』No.74 (pp.28-29) 参照。
- (2) 2019年1月30日(水)には、本学所蔵写本の稀覯文献のうち4点についてデジタル写真撮影をおこなった。
- (3) 2019年1月31日(木)～2月1日(金)には、布等の分野の専門家（佐藤留実＝五島美術館、原田あゆみ＝九州国立博物館）と共に、本学所蔵写本と包み布のうち16点について調査・研究をおこなった。
- (4) 2019年3月20日(水)～21日(木)には、本学所蔵写本と、恵林寺（山梨県甲州市）が所蔵するパーリ語貝葉写本との関連を調査するため、清水洋平・舟橋智哉の両氏を派遣した。
- (5) なお、龍谷大学世界仏教文化研究センター主催の研究セミナー「日本とタイの仏教交流の諸局面」

(全6回)において、「経典をめぐる交流の史実と現実」と題された第2回研究セミナーが開かれることになった。主催者から、「大谷貝葉」の来歴を中心とした日本国内に所在するタイ将来仏典写本についての報告をしてほしいとの依頼を受け、嘱託研究員の清水洋平が発表をおこなった(7月27日)。

2. 図書館所蔵古典籍のデータベース化

2010年度から継続中の、本学図書館所蔵古典籍を書誌データベースとして登録する作業を行い、2018年度には約770件のデジタル・アーカイブ化を進めた。

東京分室指定研究

宗教的言語の受容／ 形成についての総合的研究 —哲学的・宗教学的・人類学的 視点から—

研究代表者・名誉教授 池上 哲司
(哲学・倫理学)

1. 共同研究発表

各研究員が自らの研究課題を宗教的言語という観点から発表し、それを他の分野の視点から議論・批判するというゼミナール形式の研究会を22回ほど行った。

2. 各研究員の活動

- ・松澤研究員
マイスター・エックハルトのドイツ語説教における言説をラテン語著作における言説と比較しながら、ドイツ語説教における「言葉」の特性について研究を進めた。
- ・藤原研究員
親鸞の『教行信証』で言及されているいくつかのテーマについて集中して考察した。また、『教行信証』研究史ということにも着目した。
- ・稲葉研究員
初期(部派)仏教で使われる仏教用語や、仏教文献を伝える言語を研究した。仏教文献の抱える基礎的な問題を意識しながら、仏教用語の研究として sakkāya-の語義や非我・無所有の意味内容などを検討した。

3. 出張

- (1) 松澤研究員
2018年8月6日(月)～11日(土)、15日(水)～16日(木)：

テュービンゲン大学(ドイツ)

テュービンゲン大学中央図書館と同神学部図書館において13世紀～14世紀にかけてのドミニコ会とアウグスティノ会の説教関連資料の収集・複写を行った。

(2) 池上・松澤・藤原・稲葉研究員

2018年9月7日(金)～9日(日)：大谷大学(日本宗教学会参加)

公開シンポジウム参加および研究発表会参加

(3) 池上・松澤・藤原研究員

2019年2月3日(日)～13日(水)：前半は沖縄竹富島・石垣島、後半は長崎五島列島
沖縄・五島列島宗教的聖地実地調査。

4. 公開研究会の開催

第5回「宗教と人間」研究会

テーマ：「監獄教誨の歴史—「悪」から見た近代」

日時：2018年8月3日(金)16:00～18:00

会場：親鸞仏教センター5Fセミナー室

講師：繁田真爾(明星学園教諭／早稲田大学現代政治経済研究所特別研究員)

第6回「宗教と人間」研究会

テーマ：「恩寵と他力—キリスト教と仏教の対話—」

日時：2018年12月16日(日)13:00～17:00

会場：立教大学池袋キャンパス12号館 B1

第1・2会議室

講演者：Johannes Brachtendorf(テュービンゲン大学教授) 木越 康(大谷大学教授)
田島照久(早稲田大学名誉教授) 角田佑一(上智大学専任講師)

第7回「宗教と人間」研究会

テーマ：「仏典における弥勒に関する記述の諸相—インド撰述文献を中心にした準備的調査—」

日時：2019年2月27日(水)16:00～18:00

会場：親鸞仏教センター5Fセミナー室

講師：宮崎展昌(一般財団法人 人文情報学研究所研究員)

2019（令和元）年度「指定・一般研究」研究組織一覧（追加）

■指定研究「西藏文献研究」嘱託研究員の追加（2019年10月1日付）

研究名	研究課題及び研究組織	
西藏文献研究	研究課題	チベット語文献のデータベース化
	研究代表者	三宅伸一郎
	研究員	三宅伸一郎（教授・チベット学） 松川節（教授・モンゴル学） 上野牧生（短期大学部講師・仏教学）
	嘱託研究員	白館戒雲（本学名誉教授） 伴真一郎（2018年度西藏文献研究嘱託研究員） Sodnomdorj YANJINSUREN（モンゴル国立大学総合科学部准教授）【追加】 山口欧志（奈良文化財研究所研究員） 渡邊温子（特別研究員）【追加】 LAMA O ZHUOMA（青海民族大学宗喀巴研究院研究員） 索南多杰（中国藏学研究中心図書館館員）【追加】
	研究補助員(RA)	GENGZANG QIEZHU（博士後期課程第3学年） 秦野貴生（博士後期課程第3学年）

■科研費採択に伴う一般研究班の発足（2019年8月30日付）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（麻生班）	研究課題	19世紀後半のドイツ語文学における「地方」と「ガリツィア」の表象の比較
	研究代表者	麻生陽子（講師・ドイツ語文学・文化）
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（浦井班）	研究課題	田辺哲学の中期から後期への発展の解明－武内義範との交流を踏まえて
	研究代表者	浦井聡（任期制助教・特別研究員）
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（鎌田班）	研究課題	中世前期の飛鳥井家における顕昭の著作の受容の研究
	研究代表者	鎌田智恵（任期制助教・特別研究員）
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（高井班）	研究課題	仏教講釈文献の利用と説話の発展に関する写本学的研究－敦煌文献を中心に－
	研究代表者	高井龍（任期制助教・特別研究員）

■一般研究（コンウェイ班）研究協力員（RA）の追加（2019年8月1日付）

【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（コンウェイ班）	研究課題	中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究
	研究代表者	Michael J. Conway
	研究員	Michael J. Conway（講師・真宗学）
	協同研究員	齊藤隆信（佛教大学特任教授） 宮井里佳（埼玉工業大学人間社会学部教授）
	研究協力員(RA)	三池大地（博士後期課程第3学年）【追加】

■研究代表者の所属機関変更に伴う一般研究班の廃止（2019年9月30日付）

【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（田鍋班）	研究課題	ハイデッガー「黒ノート」におけるユダヤ問題の研究－形而上学批判を基点として
	研究代表者	田鍋良臣

2019(令和元)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介

個人研究

19世紀後半のドイツ語文学 における「地方」と「ガリツィア」 の表象の比較

研究代表者・講師 麻生 陽子
(ドイツ語文学・文化)

1840年代中葉からヨーロッパで流行した「村物語」という文芸ジャンルのなかで、「地方」は、前近代的な世界にたいする西欧読者の憧憬の投影先となり、美化されて描かれてきた。なかでも「貧困」「後進性」「多民族性」「多文化性」「ユダヤ文化」等が先鋭的にみられる空間として、独自の文学的トポスを形成してきたのが、現在のポーランド南東部とウクライナ西部一帯に位置するガリツィア地方である。18世紀末の第一次ポーランド分割によって、オーストリア・ハプスブルク帝国最大の属領として誕生したガリツィアには、ポーランド人、ルテニア人(ウクライナ人)、ユダヤ人、ドイツ人等さまざまな民族が住み、ローマ=カトリック、ギリシャ=カトリック、ユダヤ教といった異なる宗教や文化が混在していた。こうした多様性は、現代にいたるまで各方面で関心を集めている。

本研究は、この地方の文学的トポスの生成過程をたどりながら、19世紀後半のドイツ語文学で描出された「ガリツィア」およびその他の「地方」の表象について比較検討を行うものである。そのさい、ガリツィア出身のザッハー=マゾッホ(1836-1895)やフランツォース(1848-1904)らのテキストも適宜参照しながら、チェコ語圏モラヴィア地方出身のマリー・フォン・エーブナー=エッシェンバッハ(1830-1916)やオーストリアのシュタイヤマルク州出身のペーター・ローゼンゲル(1843-1918)のテキストを扱う。工業化や都市化が進み、ナショナリズムが高揚した時代であって、「ガリツィア」はいかに描出され、トポス化に至らなかった他の「地方」と比べ、どのような意味をもちえたのだろうか。同時代における農民問題、貧困、移住等の社会問題にも着目することで、「地方」および「ガリツィア」の同時代性、さらには周縁・地方が中央・都市・近代を批判的に映し出す視点となってきた可能性について明らかにする。

個人研究

田辺哲学の中期から後期への 発展の解明 ー武内義範との交流を踏まえて

研究代表者・任期制助教 浦井 聡
(宗教哲学)

田辺元(1885-1962)は西田幾多郎(1870-1945)の後継者であり、西田と共にいわゆる「京都学派」の礎を築いたとされる哲学者である。田辺は西田哲学に並ぶ独自の哲学、「田辺哲学」を構築した。田辺哲学は田辺の強靱な思索力によって練り上げられたさまざまな哲学分野(科学哲学・論理学・倫理学・歴史哲学・社会哲学・宗教哲学・芸術哲学)の複合態である。このような分野横断的かつ縦横無尽な思索の複雑さや、田辺の文章の晦渋さなどが原因となり、田辺哲学はその知名度に比して内在的研究が十分になされてきたとは言いがたい状況にある。

本研究は、このような田辺哲学をめぐる研究状況の中で、とりわけほとんど顧みられてこなかった《沈黙期》(1941-44)に光を当てるものである。田辺は1934年から国家と個人の間を論じた《種の論理》の理論的構築に着手するが、1941年に一切の著作の発表を止めて《沈黙期》に入る。この哲学的挫折のあと、田辺は1945年に京都を離れるまで、弟子の武内義範(1913-2002)を介して親鸞や曾我量深(1875-1971)の著作に対する理解を深めていた。このことが1944年11月の京都帝国大学での講演「懺悔道—Metanoetik—」や『懺悔道としての哲学』(1946)における哲学的復活の跳躍板の役割を果たす。この《沈黙期》における田辺哲学の深化の解明が、本研究の目的である。

田辺は《沈黙期》の思索の過程を手帳や武内義範宛書簡の中で記しているため、本研究は《沈黙期》前後の著作の読解と並行して田辺の手帳および田辺・武内往復書簡の翻刻を行うことで、《沈黙期》の田辺の思索の深化を実証的に解明する。このことによって、今まで断片的に理解されてきた《種の論理》と『懺悔道としての哲学』以降の宗教哲学との連続性と差異を精緻に解明することができ、ひいては1934年以降死没する1962年までの田辺哲学を統合的に理解することに大きく貢献することができるだろう。

個人研究

中世前期の飛鳥井家における
 顕昭の著作の受容の研究

研究代表者・任期制助教 鎌田 智恵
 (日本古典文学)

中世歌壇を代表する歌道家の一つである六条藤家の代表的な人物に、顕昭(1130頃-1210以降)がいる。顕昭は歌集や歌語の注釈において合理的・実証的な考証に取り組み、その成果は中世以来、高く評価されてきた。著作も多くの人々に読まれ、学ばれてきたらしいが、歌学史におけるその重要性に反して、後代的な受容の実態はあまり明らかになっていない。

これまで注目されてきたのは、鎌倉後期の飛鳥井雅有(1241-1301)による顕昭著作の書写活動である。現存する写本の大半は、彼の書写本を祖本として伝わっている。また近年、彼の孫であり、歌道家・飛鳥井家の基盤を固めた雅縁も、雅有同様に顕昭の著作を書写していた事実が指摘された。これらの事実から、飛鳥井家においては、顕昭の著作が継続的に受容されていたことが知られる。しかし従来は、彼らが書写したという事実の指摘がなされてきただけで、顕昭著作が実際に彼らにどのように読まれ、その和歌や学問形成に影響を及ぼしたのかは問われてこなかった。

そこで本研究では、雅有・雅縁を中心とする飛鳥井家の活動の調査を通して、鎌倉後期から室町前期にかけての顕昭著作の受容の実態を解明する。彼らの日記・和歌作品の分析や、歌書・歌学書の収集活動の調査に取り組むことで、顕昭の著作が後代、飛鳥井家においてどのように受容され、家説にも取り入れられたかを明らかにしたい。なお当時は飛鳥井家にとって歌道家としての土台を固めた重要な時期にあたっているが、現状、飛鳥井家に関する研究はあまり盛んでない。本研究は、顕昭の著作の後代的受容の実態を解明すると同時に、初期の飛鳥井家の動向を知る一助となることも期待する。

個人研究

仏教講釈文献の利用と説話の
 発展に関する写本学的研究
 -敦煌文献を中心に-

研究代表者・任期制助教 高井 龍
 (敦煌学)

1900年、シルクロードの要衝たる敦煌から発見された文献群は、多くが9、10世紀の書写になる寺院文書であり、当時の僧侶が儀礼や講釈の場で実際に使用した写本が多数含まれている。しかし、敦煌文献は世界各国に分散しているため、実見調査が容易でなく、また中国は、写本よりも版本による文献伝承が主であったため、写本学的な文献研究にはなお十分進展していない面がある。この問題を踏まえ、本研究では、文献の書写から伝承に至るまでなお写本を主とした9、10世紀頃、仏教がいかに講釈され、またそれが文学の発展といかに関わったのかを、敦煌文献の写本学的研究によって解明していく。具体的な2点の研究内容は、以下の通りである。

1点目は、仏教講釈と写本の利用の問題である。敦煌文献中の『維摩経』講釈文献には、筆や紙の異なる文献が強引に貼り合わされたり、内容の関係が稀薄な複数の文献を綴合して実際の講釈に用いられていたものがある。この発見に基づき、当時の仏教講釈がいかに行われたか、またいかに講釈文献が使用されていたのかについて、写本学の角度からその実態を解明する。

2点目は、敦煌文学文献と仏教説話の関係である。敦煌文献中の仏教説話「祇園因由記」は、9世紀敦煌の『維摩経』講義の中で、様々に書き換えられながら発展していったことが分かっている(「写本時代的文献伝播-以《祇園因由記》为中心-」『広島大学大学院総合科学研究科中興大學中文研究所研究生論文発表会』基調講演、2018年12月15日(土)、広島大学)。本研究では、その内容の変化を写本学の角度から具体的に明らかにするとともに、同系説話がいかに東アジアへ伝播したのかを考察することで、敦煌の仏教講釈において「祇園因由記」が担った役割を、東アジアという枠組みから相対的に評価する。

以上の研究を通して、写本時代における仏教講釈の文献利用と説話の文学的発展の解明を目指す。

2018 (平成 30) 年度「一般研究」研究成果概要

共同研究

紋章との比較による系譜の 図像化規則とその構造分析

研究代表者・教授 柴田 みゆき
(情報処理学)

本研究は平成 26 年度に採択され、平成 30 年度をもって 5 年間の研究期間が終了した。以下に本研究の成果を報告する。

系図や紋章あるいは家紋を目にしたとき、人間は、誰かのもの、あるいはどこかの家のものと判別可能である。しかしそれらが表象する内容の正確かつ完璧な理解は、それらが内包する膨大な情報量ゆえに常に疑問が残る。本研究の意義は、人間が漠然と認識してきたこれらの標章が、時代によって様々にその意義を変えてきた可能性を提示するところにある。また、その解明のためには膨大な静止画データの整理と分析が必要となるが、現在の主流である個別の要素による分類では解決できない理由とその改善点も指摘した。

具体的には、日本と海外（特に英国とポーランド）の文献・実地調査から、紋章・系図が持つ図像化規則とその構造を検討し、次の 5 点の成果を得た。

- (1) 紋章構造の記録に関して、不変の個人情報以外に、変動情報・マーシャリング情報・ケイデンシー情報の必要性を提案した。
- (2) 紋章の認定証をテキスト解析し、情報を補完する手法を提案した。
- (3) 中世の人々の紋章に対する理解を、シェイクスピアの紋章と彼の作品から解明した。
- (4) 紋章に関する書籍の図情報の信憑性について、再調査する必要性を示した。
- (5) 西洋や中国・朝鮮では血族の継承を重視する一方、日本では家の継承を重視する傾向について、比較研究の必要性を示した。

上記の成果を、国内外の学会の場を通じて公開した。その内訳は、雑誌論文 1 件、学会発表 8 件、その他（発表要旨）7 件である。

今後の課題として、次の 2 点をあげる。

- (1) イングランドの紋章の構造の分析・調査を継続し、紋章の例外を調査する。
- (2) 各系図様式の分析・調査を継続し、日本における系図概念のあり方を通史的に検討する。

共同研究

健聴児ならびに聴覚障害児の 数学的コミュニケーション能力の 測定方法の開発

研究代表者・教授 江森 英世
(数学教育学)

Polya は、蓋然性を含む自由な思考を許容することが数学教育において必要だと述べた。従来のコミュニケーション研究、特に新しいアイデアが生み出される過程を認知的に分析するコミュニケーションの創発性に関する研究では、この蓋然的推論という概念が新しいアイデアを生み出す原動力として用いられてきた。「たぶん～だろう、～なのではないか」という数学的厳密性という視点がある程度無視した推論がなければ、つまり、知識として知っている正しいことだけを積み重ねていっても、自分にとって未知の新たな体験となる問題が解決されるわけではない。その意味で、私たちは、これまでの研究において、新しい発見をもたらす蓋然的推論の価値を重視してきたのである。

しかし、瞬時に行なわれるメッセージ解釈において、これまでの研究でも、蓋然的推論という概念では説明がつかない事例が発見されている。そこで本年度の研究では、こうした蓋然性だけでは分析しきれなかった事例を新たな視点から分析する方法として、kant や Schopenhauer らの哲学に見出される「経験的直観」という概念を研究方法論として用いて、数学的コミュニケーションにおける経験的直観の役割について考察を行った。私たちは、事例分析を通して、「数学的なコミュニケーションでは、メッセージの受け手は、出題者から提示された問題文を読みながら問題の解決に取りかかり、問題文に示された文章を数学の言葉である式に直し、その式によって美しい答えが出るかどうかを探りながら、これまでの学習で培ってきた知識や経験を総動員し、メッセージ解釈を行っている」ことを示した。

今年度の研究成果は、「数学的なコミュニケーションでは、コミュニケーションの経済性を高めるために、受け手が持っている知識や経験を駆使した経験的直観を多用しながらメッセージ解釈が行われている」ことを究明したことである。

共同研究

ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究

研究代表者・非常勤講師 上田 敏樹
(情報工学)

本研究は、学生が装着したリストバンド型ウェアラブル端末、メガネ型ウェアラブル端末及びスマートフォンから得られたバイタルデータ（心拍数、睡眠データなど）やライフログ（移動距離、ルートなど）と学生の身体状態および学習行動との関係を見出すことを主目的としている。2016年度はBMI改善事例を含めて大学生の睡眠時間や睡眠時間帯を基準にした生活の改善事例について考察した。2017年度は睡眠時間帯の改善を希望する1名の学生に対し、ほぼ1年間に渡りリストバンド型とメガネ型のウェアラブル端末を利用して生体データを直接取得した。2018年度は取得データについて、自主的な睡眠時間帯改善プロセスにおけるデータ解析と、さらに睡眠状態と授業中の集中度の相関関係の分析を試みた。本実験により、大学生の睡眠状況を自身が自覚するための方法としてリストバンド型ウェアラブル端末が有効であること、また、生活リズムが不規則になる原因はスマートフォンの過度な利用にあること、さらに生活パターンを可視化することが睡眠時間帯の改善に役立つことが一事例として確認できた。ただし、メガネ型ウェアラブル端末を利用して測定した授業中の集中度とリストバンド型ウェアラブル端末を利用して測定した睡眠時間との相関関係は取得したデータからは見出すことができなかった。数ヶ月以上に渡るデータ取得において、複数の被験者から効率的にデータを収集することが今後の研究の課題である。

研究成果については次の通り国際学会等で発表した。

1. Assisting Student's Health Consciousness with IoT Wearable Device, 2018 IEEE TENCON Jeju Korea, 2018-10-30
2. ウェアラブル端末を利用して改善する学生の睡眠時間帯についての考察 大谷大学真宗総合研究所研究紀要 第36号 pp.45-60

共同研究

人口減少時代の地方都市・中山間地域の多文化化と地域振興に関する社会学的研究

研究代表者・准教授 徳田 剛
(地域社会学)

本研究は、地方在住外国人の現状や支援ニーズ、多文化共生に向けた地方部における諸団体の活動状況・取り組み課題について、地域調査の手法で明らかにするものである。最終年度にあたる2018年度は、公開研究会や学会等での成果発表を行いつつ、3年間の成果全体の取りまとめ作業に取り組んだ。

2018年7月と11月に愛媛県松山市において「移住と共生」研究会を開催した。7月の研究会では一條玲香氏（東北大学）をお招きし、日本で暮らす外国ルーツの方々のメンタルヘルスについてのご講演をいただいた。今回の講演では、国際移動・移住に伴うメンタルヘルス上の課題、日本で暮らす結婚移住女性が抱える異文化ストレスの具体的な内容、スムーズな異文化適応をサポートするための方法やノウハウなどについて、臨床心理士としての専門的見地からお話をいただいた。

11月の研究会では、日本に暮らすムスリムの人たちのコミュニティや宗教生活を取り上げた。講師として、日本のムスリム・コミュニティの研究者である岡井宏文氏（早稲田大学）をお招きし、「日本のムスリム社会と多文化共生」と題した講演をいただいた。また、特別ゲストとして新居浜マスジド（モスク）の代表である浜中彰氏より、ムスリムの宗教生活や地域での暮らしぶりについてお話しいただいた。

そして、本研究の成果全体を研究代表者・分担者、研究協力者や研究会にお招きした講演者らの分担執筆によって取りまとめを行い、徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子編著『地方発 外国人住民との地域づくりー多文化共生の現場から』（晃洋書房）という論集として2019年2月に出版した。同年4月からの法改正を控え、全国的に外国人人口の増加とそれへの対応が迫られる中、先行研究が乏しい地方の多文化共生の取り組みについてベストなタイミングで出版することをもって、3年間の研究を締めくくることができた。

共同研究

モンゴルの世界遺産 「大ブルカン・カルドゥン山」 に関する学融的研究

研究代表者・教授 松川 節
(モンゴル学)

本研究は、1)「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」遺産の研究基盤を構築し、世界遺産富士山との比較研究を行った上で、2) 周辺のベレーヴェン寺院・アラシャーンハダ遺蹟の調査・研究と、それらの世界遺産登録のための実効的提言を行い、3) 結果としてもたらされる新たな知見に基づき、モンゴル宗教文化史を再構築することをめざした。

今年度はモンゴル国における①現地調査 (4/26~5/6)、②国際ワークショップの開催 (9/21-22) ③日本における調査・研究 (7/27~8/1、11/21~28) を実施した。①は大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観の現地調査を行い、研究代表者の松川、モンゴル側研究協力者のツォクトバートル、ハシマルガドが参加した。②は「世界遺産「ブルカン・カルドゥン山とその周辺の神聖な景観」-研究・保存・保護」と題し、モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所主催、大谷大学共催、在モンゴル日本国大使館などの後援を得、科研費および国際交流基金知的会議助成を得て開催され、代表者の松川、研究員の三宅らが参加・報告した。③はモンゴル国より研究協力者のツォクトバートル、ハシマルガド、サロールボヤンを招聘し、松川とともに世界遺産富士山及び関連遺産を巡検し、また研究協力者として E. プレブジャブ (モンゴル科学アカデミー言語文学研究所研究員) を日本に招聘し、大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の歴史的地名について共同研究を行った。

国際ワークショップの成果は論文集としてウランバートル市で公開され、また、山岳祭祀に関する資料集『ブルカン・カルドゥン祭祀-文書集成-』(645 pp.) が同じくウランバートル市で公開された。

共同研究

地方の社会解体的危機に抗する 〈地域生活文化圏〉の形成と展開

研究代表者・教授 西村 雄郎
(地域社会学・コミュニティ論)

本研究の目的は、地方の社会解体的危機が進む中で、政府が「選択と集中」をキーワードとして地方再編を推進していることに対抗し、各地域がもつ自然・歴史・文化の中で育まれた地域固有の生活原理である〈地域アイデア〉を基底におき、地域住民が自律的、内発的に形成しているサステイナブルな〈地域生活文化圏〉の特質を解明し、これを通して「日本社会の新たなあり方」を構想することにある。

この課題を達成するため、16名の研究分担者、研究協力者からなる本研究チームは、2014-2016年度と2017-2019年度に科学研究費基盤研究(B)をうけ、十勝・帯広圏、大崎圏、綾部圏、日田圏の4圏域で調査研究を行ってきた。第1期では各圏域の地域活動の事例的分析を行い、第2期では事例研究を深め、それらの活動の〈地域生活文化圏〉における意味づけに分析を加え、研究対象地域の特質を明らかにしてきた。

本年度はこれをふまえ1) 十勝・帯広地域生活文化圏、2) 大崎地域生活文化圏、3) 綾部地域生活文化圏、4) 日田地域生活文化圏における調査研究を継続するとともに、新たな比較対照事例として①岩手県北上市における大規模農業法人経営、②福井県鯖江市における稲作兼業と地場産業を中心とした地域づくり、③大分県中津市下郷農協における小規模農協を中心とした地域づくりについて聞き取り調査を行った。

これらの研究を通して明らかになってきたことは、各地域が固有の歴史を積み重ねる中で、今日的な地域構造と地域アイデアを形成し、その構造にみあった地域づくりを展開してきているという事実である。今後はこれら地域の調査研究を深めるとともに、比較検討を通して「地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開」の特質を明らかにするとともに、最終的な研究課題として設定した「日本社会の新たなあり方」を構想していきたい。

共同研究

変動帯の文化地質学

研究代表者・教授 鈴木 寿志
(文化地質学)

文化地質学の科研費は基盤研究 (B) として2年目を迎え、真宗総合研究所では計6名体制で共同研究を行った。

2018年度は、文化地質学の研究成果を掲載する新たな雑誌『地質と文化』を6月30日(土)に創刊した。そして12月31日(月)には第2号を刊行した。日本地質学会札幌大会では、9月6日(木)に15件の口頭発表が行われる予定であったが、当日未明の地震により停電が続いたため中止となった。ただしポスター発表4件については、会場で発表された。地質学会では代替として12月2日(日)につくば特別大会を開催した。その際に文化地質学の講演3件が口頭で発表された。3月2日(土)・3日(日)には文化地質研究会第2回学術大会を大谷大学にて開催し、18件の口頭発表と3件のポスター発表がなされた。研究代表者は、『地質と文化』の編集を担当し、地質学会・文化地質研究会では世話人を務めた。また以下の研究をそれぞれ推進した。

葡萄酒醸造文化と地形 [鈴木寿志]：山梨県甲州市勝沼地区の扇状地地形と葡萄酒醸造所との関わりについて現地調査を行った。

欧州文学と地質学 [廣川智貴]：18世紀において、恐怖の対象であった険しい山は、「崇高」なものとして肯定的に捉えられた。ドイツ啓蒙主義期の詩人プロッセの『この世における神の享受』にも、そうした山が描かれている。

仏教と地質学 [清水洋平]：タイ仏教の結界石について、寺院におけるその配置の異なりを考察する為の調査を実施した。「マハーシーマー」と呼ばれる特徴ある結界を有する複数の寺院の存在を確認した。

幼児教育と地質学 [梅田真樹]：アンケート調査の結果、保育士は石や砂に興味がなかったことがわかった。石や砂に対して興味をもたせるには、顕微鏡を用いたアプローチが有効であるという結果が得られた。

地質学の普及 [大井修吾]：滋賀県内の地形・地質の見どころについて調査したところ、すでに消失している地点も多かった。そのような地点についていかに情報を残していくのが課題として挙げられる。

共同研究

世親作『釈軌論』の総合的研究

研究代表者・講師 上野 牧生
(仏教学)

本研究は5世紀頃のインド文化圏で活動した仏教僧ヴァスバンドゥ(世親)の手になる『釈軌論』の解説研究である。残念ながら『釈軌論』はグナマティ(徳慧)の『釈軌論注』ともサンスクリット原典の発見に至っておらず、また漢訳も存在せず、唯一、チベット訳が残されるのみである。

五カ年にわたる研究計画の二年目に当たる本年度は、第5章の批判的校訂テキストと訳注を完成させた。その訳注については学術雑誌への投稿を完了した。

第5章は数多ある世親の著述の中でもかなり特殊な部類に属する。その内容は後進の「説法者」を対象として作成された「法話例集」とでもいうべきものである。例えば本章の第2節は約40ほどの小節から構成されるが、各小節は様々な譬喩を用いて敬聴の利点や佛説の徳性を簡潔に説明する内容であり、聴き手を佛法の聴聞へと動機づける目的を有する点で共通する。またそれらの小節は何れも「それゆえ、敬意を持って佛説を聴くべきである」という類の締結文で締め括られる点で共通する。さらに第3節では居眠したり佛教を誤解したりする聴衆に対して効果的な法話の見本が例示される。これらはずまり、説法者が各小節を取捨選択し、実際にそれぞれの現場にて法話として語り得るための工夫であると推測される。そうした工夫は実際に説法の現場に身を置く説法者を意識してのものであろう。

世親がそうした著述を残した背景には、出家者と在家者の双方において佛教が衰退し、佛教がまさしく死に瀕しているという、いわば法滅観がある。それは『釈軌論』に先行する『阿毘達磨俱舍論』の結頌でも如実に表明されているが、この第5章では、語り手の類勢が聴き手に累を及ぼし、在家者に向けて誤った解説をする出家者が増えたとの危惧が表明されている。そのため、伝統知の継承と後進の育成を念頭に置いて『釈軌論』が著述された様子が伺われる。

共同研究

5～13世紀ユーラシア東方
における都城と仏塔の比較史的
研究と3Dアーカイブ作成

研究代表者・教授 武田 和哉
(人文情報学・歴史学・考古学)

本研究は、日本や中国などを含むユーラシア東方の世界において、主として5～13世紀の時期を中心として各地に造営された都城と、仏教のシンボリックなモニュメントである仏塔に焦点を当て、双方の果たした役割や位置関係、モニュメントとしての特質などの分析を通じて、その背景にある当該時期の政治・経済および社会における仏教の在り方と、その歴史の変遷について、歴史学・考古学・仏教学などの各分野の立場から多角的視点での比較研究を行うことを目的としている。さらには、その過程において、仏塔などの3Dアーカイブの作成も行って、その製作技術についても検討を併せて行うものである。

2018年度に採択を受けて研究班を発足させるとともに、昨年度は海外(中国)や国内の仏塔・都城について研究班内で分担して現地での調査や撮影作業等を実施した。その結果を踏まえて、仏塔の3Dデータの製作に関しては、技術的手法やデータの精度の面での課題点の洗い出しを行いつつ、成果物の方向性に関する基礎的な議論を行った。

今年度についても同様に、海外(中国)や国内の調査と撮影を継続して実施しながら、各研究者が分担している研究分野の深化をはかっている。それらについては、年度末に予定している研究総括会議において各成果・知見についての情報の共有と議論等を実施する。以上のような調査研究活動を通じて、2020年度に予定されている研究成果のとりまとめに向けた準備も徐々に行うこととしたい。

本研究が主たる対象とする5-13世紀の日本や中国における仏教と政治・社会等の関係や、その歴史の変遷、時代的背景等を総合的に勘案しつつ、各種のデータも提示して新たな研究視点の提示を行うとともに、仏塔研究における新たな研究視点や計測手法等も提示することを目指している。

共同研究

歴史史料・考古資料活用による
次世代作物資源の多様性構築
に向けた学際的研究

研究代表者・教授 武田 和哉
(人文情報学・歴史学・考古学)

本研究は、東アジア食文化で重要な位置を占め、日本や中国の農書をはじめとする歴史史料に記載が多いアブラナ科作物を研究材料とする。アブラナ科作物は全世界各地で栽培され、東アジアの米主食文化圏では中心的副食である。近年、日本では伝統野菜が注目され、これら品種の保存を通じ、遺伝的多様性の重要度への認識が高まっている。

本研究は、2014年度に採択された基盤研究(B)(海外学術調査)「アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究」において得られた成果や知見、さらには国内外の諸機関・団体・個人等との学術交流・信頼関係等の学術的資産を継承しつつ、次世代の農資源利用という課題に資する成果の形成に向けてさらに活動を展開している。

本研究では、公刊された歴史史料の記述や図像、地方文書等の在地史料から、品種・栽培技術・栽培環境に関する情報を収集し、過去の品種の形態的特徴や栽培方法を人文的側面から把握する。また、現品種にどの形質が受け継がれ、どの形質が選抜の過程で失われたかという問題や、現存品種間の交雑、遺伝解析、各作物が持つゲノムが環境、肥培管理から受ける要因を、比較ゲノム等の手法により、農学的・植物学的な理解を行う。最終的に文理融合による解釈から、アブラナ科作物品種の歴史的变化を踏まえた将来の農資源の在り方、多様性を理解することを目的とする。

2018年7月の採択以降に活動を開始し、昨年度は研究会合を行い、各自の分担部分の研究を推進した。また、今年度は成果物として『菜の花と人間の文化史』(勉強出版・アジア遊学235)を刊行したほか、前科研から交流を継続している中国の西北農林科技大学において国際セミナー等を共催した。今後は、農学的研究分析と人文的研究調査を並行して継続し、双方の所見等を研究会議の場で情報共有しつつ、検討・議論を行う予定である。

共同研究

新出資料の調査と分析に基づく
沖繩仏教史・真宗史に関する
総合的研究

研究代表者・教授 福島 栄寿
(近代日本仏教史・近代日本思想史)

本研究班では、以下の2点に重点を置き研究活動を実施。Ⅰ：九州地域の真宗寺院の史料調査を通しての関連新出史料の探索。Ⅱ：研究班の研究結果の公開に向けての見通しの検討。Ⅰとして、2018年度中に4回の調査実施。①2018年6月6日(水)・7日(木) 久留米市伯東寺(大谷派)で福島と長谷暢(東本願寺沖繩別院職員・協同研究員)が調査を実施。当寺は清原競秀『日々流行之記』にもみえ、渡琉した田原法水や清原の本山上申の際に頼った細川千巖住職の寺院。②同年8月21日(水)・22日(木) 福島が坊津市久志浦の広泉寺(本願寺派)、八代市光徳寺(大谷派)の史料調査を実施。広泉寺は真宗禁制下の琉球で布教したため流罪となった仲尾次政隆(1810~1871、琉球へ真宗を伝えたと言われる海商・中村宇兵衛の玄孫)ゆかりの寺院。中村家伝来の厨子入りの名号、蓮如筆の名号の軸などを撮影した。光徳寺は『日々流行之記』に名がみえ、調査を実施。③同年12月22日(土)・23日(日) 福島、長谷が大谷派鹿兒島別院で調査を実施。琉球布教端緒に関する資料、明治10年の真宗法難事件の顛末や事件解決への動向を知り得る新出史料の撮影を実施。④2019年2月15日(金)~17日(日) 知名定寛(神戸女子大教授・協同研究員)、川邊雄大(二松学舎大非常勤講師・協同研究員)、長谷、福島が、長崎市正林寺(大谷派)・天福寺(曹洞宗)、西海市真光寺・信行寺(大谷派)の資料調査を実施。長崎は田原、清原たちがキリスト教対策に派遣されていた地域で、潜伏切支丹との関連についても知見を得た。Ⅱとして、2018年8月17日(金)・18日(土)、2019年3月23日(土)・24日(日)に研究班4名で集まり共同研究会(於：真宗総合研究所)を開催し、研究成果の公開に向けての検討を実施した。なお、研究成果の一部として、福島が「明治初年琉球の真宗布教―真宗法難事件」と廃琉置県(琉球処分)―(『立命館文学』第660号、2019年2月)を発表した。

共同研究

西洋哲学の初期受容とその展開
―井上円了と清沢満之の東大時代
未公開ノートの公開―

研究代表者・教授 村山 保史
(西洋哲学・日本哲学)

本研究の目的は、井上円了と清沢満之の遺稿ノートから発見された東京大学在学時の外国人哲学教師の哲学関係の講義録とそれに関連する学生の学習録の公開作業を通じて日本における西洋哲学の初期受容の一形態を解明し、あわせて、その後の井上と清沢の思想発展過程の一端を解明することである。そのため本研究では以下の三つ研究課題を設定している。(1) 井上の哲学ノートを編集し、そこにみられる思想を分析すること、(2) 清沢の哲学ノートを編集し、そこにみられる思想を分析すること、(3) 明治前期の東京大学の哲学教育が私立大学の教育にどのように継承されたかを初期の哲学館と真宗大学における教育制度の確認を通じて明らかにすること。2018年度は研究課題(1)(2)を重点課題とした。

研究課題(1)(2)に関して成果の一部を示せば、井上ノートを翻刻(翻訳)するメンバー(3名)と清沢ノートを翻刻・翻訳するメンバー(6名)を選出し、井上ノートについては「古代哲学 明治十七年六月 井上円了」「最近世哲学史」等の9冊のノートの翻刻に当たり、2019年3月に「古代哲学 明治十七年六月 井上円了」ノートの前半部分と「東洋哲学史 卷一(井上哲次郎口述)」ノートの全体の翻刻を『井上円了センター年報』第27号に公開した。清沢ノートについては、2013年~2015年度の科学研究において翻刻・翻訳したフェノロサの「哲学(史)」講義の部分(カントまで)に続く、フィヒテからシェリング部分の仮の翻刻・翻訳を作成するとともに、これまで日本では講義録の公開例がなかったブッセの「古代哲学史」講義の仮の翻刻・翻訳を作成した。

研究課題(3)については、作業を前倒して2019年3月に出版された『論集 井上円了』(井上円了研究センター編)にライナ・シュルツァ「井上円了を活論する―東洋大学の建学精神について―」を掲載した。また、2018年度に予定していた共同研究会(3月)、合宿研究会(12月)、公開講演会(3月)もすべて予定どおり実施した。

個人研究

前近代中国黄河中流域における水利権と水利組織

研究代表者・准教授 井黒 忍
(東洋史学)

山西省曲沃県に現存する水利碑刻の分析を通して、王朝の枠組みを超えて水利権の根拠として受け継がれていく増刻碑と特定の時代の状況を復元する重刻碑という異なる類型の水利碑が存在することを明らかにした。このうち、増刻碑は過去から現在に至る時間を積み重ねることで、重刻碑は過去のある時点を復元することで旧章と称された水利秩序および水利伝統を体現したものと解釈することができる。

18世紀から19世紀における地震や火災などの自然災害や人心荒廃に伴う訴訟の頻発といった社会不安に対して、山西省曲沃県の地域社会における対応は同一の水資源を共有する21村の水利連合として、さらには曲村を中核とする靳氏宗族の結集として現出した。その際に水利受益者である21村の村落連合は、重刻碑の建造により伝統を確認するという名のもとに、地方官の介入を招来し、伝統の起源を公権力の認可を得た元代大徳年間に求め、現状を反映させる形で水利権の所在を固定させるという方法を用いた。

また、曲村の靳氏は、17世紀前半から始まる家譜の作成、17世紀後半から18世紀前半にかけての建廟・立碑の際に、自らの宗族の直接の起源を元代に求め、新村建設や村落合併などによる曲村の起源を大徳年間に求めた。さらに、19世紀初頭の飢饉という背景のもとで家譜を編集し、19世紀中頃には重刻碑の建造を通して、14世紀以来の伝統を再確認することで、自らを中心とする地域社会の秩序の安定化が目指されたことを明らかにした。

なお、2019年2月には大谷大学においてワークショップ「宗族と水利から華北の「村」を再考する」を開催し、歴史学、社会学、農学など異なる角度からの検討を行うとともに、研究の成果を井黒忍「彫り直された伝統：前近代山西の基層社会における水利秩序の形成と再編」(『歴史学研究』第990号、50-62頁、2019年)にまとめ、公表した。

個人研究

北朝鮮の音楽政策に関する研究

研究代表者・非常勤講師 森 類臣
(社会学・韓国朝鮮学)

本研究では、朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)における文化政策のうち、音楽政策を研究対象とした。北朝鮮は音楽を政治に結合させる「音楽政治」を実践してきたが、そのような音楽をめぐる政策の実態と影響、意味を明らかにすることが本研究の目的であった。方法論としては、研究対象を歴史社会的アプローチによって時代別に大枠を整理し、さらに音楽と政治を扱う社会学理論を援用して分析した。

分析の結果、以下のような結論が導出できた。

(1) 北朝鮮の音楽政策に関する歴史的考察

一次資料を収集・分析することによって北朝鮮の主流音楽団の系譜・系列を整理した。また、金日成時代、金正日時代、金正恩時代というように大まかな時期区分をしながら、各時期の音楽政策の特徴を導出した。

金正日が文化芸術界を指導し始めてからは、金正日自ら執筆したとされる文化芸術理論が規範化し、それら理論を解説し普及させる関連書籍や論文が大幅に増大したことが分かった。これは、金正日が芸術界・文化界を完全に把握したことの傍証となる。金日成時代に基礎が作られた北朝鮮の音楽政策は、金正日によってその理論的枠組みの集大成が試みられたことが分かった。

(2) モデルの構築と検証

まず、音楽政策の基本理論の内容について把握しつつ、金正日時代の主要楽団である万寿台芸術団・普天堡電子楽団などを事例研究した。音楽政策の基本理論と事例研究によって、金正日時代の音楽政策の基本モデルを構築することができた。

次に、構築した基本モデルの有効性を検証・確認した。

(3) 現状分析

構築したモデルを踏まえつつ、金正恩時代の音楽政策を、北朝鮮が国家として追求している目的や重点政策に位置づける作業を行った。特に、金正恩時代の国家政策上のキーワードである「並進路線」「社会主義文明国」「自強力第一主義」などと音楽政策の関連性を把握することに努めた。その上で、金正日時代と金正恩時代の連続性を考察するという作業を進めた。そ

の結果、「金正恩時代」の音楽政策の方向性、「金正日時代」の音楽政策との共通性、国家政策と音楽団の関係性についてある程度解明できた。

個人研究

傷痍軍人職業保護事業で 整形外科医が果たした 役割についての歴史的研究

研究代表者・非常勤講師 上田 早記子
(社会福祉学)

現行の障害者に対する支援は戦後になり突如として出現したわけではなく、戦前における取り組みが時と共に蓄積、発展し、現在の形となっている。しかし、戦前と戦後との繋がりについて明らかになっているものは少ない。障害者の就労支援を遡ると江戸時代の三弦や三療、明治時代における特殊教育などをあげることができる。そのうち傷痍軍人に対する職業保護は、他とは異なり軍人対策という限界や傷痍軍人のみを対象としているという限界があるものの、現行の就労支援対策との繋がりを考えていく上での歴史的位置付けが大きい。

本研究は、過去と現在を繋げることを目的とし、特に日中戦争時と戦後の繋がりを明らかにすることである。そのため、日中戦争時に設立された傷痍軍人福岡職業補導所を取り上げ、九州帝国大学の整形外科医が関与したことによって、①義肢などの機能を向上させ、②義肢の装着後の訓練を改善し、③作業訓練を開発した結果、傷痍軍人に対する就労支援技術が急速に向上したことを明らかにするものである。その上で、④戦中に開発改善した技術が戦後、新たな分野である作業療法、職業準備訓練と名称をかえて引き継がれていったことを明らかとするものである。

2019年度は主にこれまでの研究成果をまとめることに重点を置いた。2016年度に①～③の成果報告とし「傷痍軍人職業保護対策に整形外科医が果たした役割」とのタイトルで論文報告をした。2019年度はまだ報告していなかった④の成果報告として「職業訓練に至るまでの診療体系」とのタイトルで論文報告をした。また、全体の総括として関西社会福祉学会において「近現代における傷痍軍人対策と障害者福祉対策の連続性と非連続性」との報告を行った。

今後の研究の課題として、当時傷痍軍人職業補導所を利用していた方やそのご家族でヒアリング可能な方からヒアリング調査を行うことである。

個人研究

幼児期・児童期前期における 自己評価変動モデルの構築

研究代表者・講師 渡邊 大介
(教育心理学)

本研究は、能力認知に伴う一連の自己評価変動過程に関して、自己評価変動過程を規定する要因を特定し、幼児期や児童期前期特有のモデルを構築することを目的としている。2018年度は、活動への自己関与度（自分がその活動を好きか嫌いか）と友人関与度（友人がその活動を好きか嫌いか）を自己評価変動の規定要因として捉え、関与度の高い（好きな）活動と低い（嫌いな）活動において、自己と他者の能力認知に違いが見られるかどうかを明らかにした。

幼稚園の年長児64名を調査対象とし、調査対象児および一番仲の良い友人の好きな活動と嫌いな活動について、自己と友人の能力認知に関する質問を行った。その結果、幼児は自己の好きな活動では自己能力を友人能力よりも高く認知し、嫌いな活動では自己能力を友人能力よりも低く認知した。これは先行研究(e.g., Watanabe & Yuzawa, 2013)と同様であり、自己評価維持モデル(e.g., Tesser, 2003)で想定される比較過程と反映過程が幼児にも生起し、能力認知によって自己評価の高揚が生じることを示唆するものであった。

一方、友人の好きな活動では友人能力を自己能力よりも高く認知するといった結果が得られたが、これは、親密な関係を維持するために友人を好意的に捉えようとする特徴の現れと推測される。好きな活動が一致した場合に、自己と友人の能力を同程度と認知した幼児が多かったことから、友人が（自己と同程度に）優れていると見なす傾向は、関係性や自己評価の維持に重要な役割を果たしていると言える。他方、友人の嫌いな活動で友人能力を自己よりも低く認知した点については、友人関与度の低さから、関係性維持に重要ではないと考え、シビアに回答したとも考えられるが定かではない。そこで生じる自己評価の変動過程や能力認知の理由とともに、今後の課題としたい。

個人研究

再犯リスク低減と更生の 基盤づくりを目指したピアサポート 活動の試行的実践とその評価

研究代表者・教授 脇中 洋
(発達心理学・法心理学)

研究助成(科研費基盤研究(C):16K03379)3年目の2018年度は以下の活動を行った。国立重度知的障害者総合施設のぞみの園による「矯正施設を退所し自宅等で地域生活をしている知的障害者等の生活実態調査」に関わる研究検討委員として企画・分析に参画し、紀要論文にまとめた。また現職者向け研修(2月)で研修コーディネーターを務めた。

刑事裁判関連では、知的障害のある被告人の放火事件における情状鑑定結果について、発達臨床研究会(京都・4月)で発表したほか、知的障害者に対する誤った聴取が事件化されてしまった事案について「季刊・刑事弁護」に投稿した(6月)。さらに知的障害のある被告人の窃盗事件で事実関係を争い心理学的鑑定意見書を作成(12月)することで、知的障害者の入り口段階(取調べから公判まで)における更生保護につながる知見を得た。

3月にはカナダ・ヴィクトリア市内の3カ所のーフウェイハウス(Bill Mudge House、Manchester House、Sulvation Army)や相談支援施設(Victoria Brain Injury Society、Mens' Trauma Centre)を訪問し、各施設のコネプツの違いや連携のあり方について詳細に調査した。また元仮出所事務所職員や更生保護施設職員と時間をかけて意見交換し、今後の研究計画への協力態勢を整えた。

脇中洋、「司法面接法もどきの被害者聴取」、『季刊刑事弁護』、現代人文社、第94号、pp.137-140、(2018)

古屋和彦・関口清美・水藤昌彦・脇中洋・相馬大祐、「矯正施設を退所し自宅等で地域生活をしている知的障害者等の生活実態調査-全国地域生活定着支援センターに対するアンケート調査から-」、『国立重度知的障害者総合施設のぞみの園紀要』、国立重度知的障害者総合施設のぞみの園、第11号、pp.103-123、(2018)

大倉得史、脇中洋、「事例報告:共同生活中のけじめ行為から傷害致死罪に問われた被告人Aの心理学的鑑定」、『法と心理』、法と心理学会、18巻1号、

pp.117-122、(2018)

脇中洋、「日野町事件・HM氏の言い回しの変化に関する心理学的鑑定意見書」、日野町事件第2次再審請求弁護団提出、pp.1-35、(2018)

脇中洋、「〈大阪高裁平成30年(う)第935号窃盗被告事件〉保安員の証言および被告人の行為に関する心理学的鑑定意見書」、大阪高裁平成30年(う)第935号窃盗被告事件弁護団提出、pp.1-47、(2018)

脇中洋、安田三江子、「カナダBC州ヴィクトリアにおける更生保護施設の実態」、法と心理学会、第19回大会、関西国際大学・尼崎市、2018年10月7日

個人研究

東南アジアサッカー市場における 移民選手の戦略とネットワーク

研究代表者・教授 阿部 利洋
(社会学)

本研究は、近年急速に発展をとげる東南アジアの新興サッカー市場を対象に、そこにおける外国人選手の役割やネットワークに考察を加えることを目的としている。サッカーをテーマとする社会学関連文献と比較すると、東南アジア地域に着目し、移民選手の能動的なサバイバル戦略と独特のネットワーク構築に焦点をあてようと試みる点に新規性がある。

2018年度は、東南アジアのサッカー新興国において、移民選手を中心とした外国人アクターがどのような役割を果たしているか、という関心を中心として複数回の現地調査を行った。昨年度は主としてカンボジアリーグで活動するアフリカ出身の移民選手に焦点をあてた聞き取りを行ったが、そこで明らかになったのが「東南アジア隣国リーグ(とくにメコン地域)を射程に入れた彼らの移籍ネットワーク」と「カンボジアリーグにおける日系アクターの影響」という視点の重要性であった。そこで、今年度は上記2点を視野に入れた情報収集を実施すると同時に、調査対象であるサッカー新興国のグローバルな位置づけや当該社会内部におけるサッカーの役割といった論点に関する理論的な検討を行い、得られた知見を以下の論文にまとめた。

阿部利洋、2019、「カンボジア・サッカーのグローバル化」、『真宗総合研究所研究紀要』第36号、31-44頁。

個人研究

インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築

研究代表者・教授 福田 洋一
(仏教学)

本研究は、インド仏教論理学の大成者ダルマキールティの第二の主著『ブラマーナ・ヴィニシュチャヤ』に対する、現存するチベット人注釈書8点について、(1) テキストデータを入力し、(2) 全文検索サイトを公開し、(3) 注釈書に織り込まれた詳細な内容見出し(科段)を抽出・整理し、原典のロケーションを対応させた科段対照表を作成することを目的とする。これらの注釈の多くは新出資料であり、また文字の判読の困難な草書体で書かれているため利用が進んでいなかった。平成26～28年度科研費基盤研究(C)「初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究」において、これら写本のテキストの入力を進め、全文検索サイトも構築したが、本研究はその基礎の上に立って、特にインド・チベット論理学双方の研究者が、これら貴重な『ブラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の注釈書を容易に参照できる資料を提供することを目指す。

初期チベット論理学における『ブラマーナ・ヴィニシュチャヤ』のチベット人の注釈は、8点が現存している。以下のカダム派論師の注釈を2018年度までに入力した。

1. ゴク・ローデンシェラップ (1059-1109)
2. チャバ・チューキセンゲ (1109-1169)
3. ツァンナクバ・ツォンドウセンゲ (12世紀)
4. チャンチュプセンパー・ジュニャーナシュリー (年代未詳)
5. チュミクパ・センゲペル (1200-1280頃)
6. チョムデン・リクペーレルディ (1227-1305)
7. プトゥン・リンチェンドゥブ (1290-1364)
8. ポトン・ジャンペーヤン・ショレワ (年代未詳)

以上のうち、科段ができてきているのは、2、3、8である。今後は1、7の科段を作成し、原典との対応を公開する。

個人研究

嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究

研究代表者・准教授 池永 真義
(美術科教育学)

聴覚や触覚、視覚などの感覚における互換性を意味する「感覚間相互作用」は、古くから美術の領域で想像力を発揮し、新たな表現を生み出す重要な手立てとなってきた。

表現教育の実践者は、幼い子どもほど共感覚が優れており、柔軟な表現を生み出すことを経験的に理解している。例えば幼児教育における身体活動、音楽(リトミック)等の表現活動を一体的に行う複合的表現活動の実践などがある。

図画工作科の表現領域においても、視覚だけでなく触覚や身体感覚等、諸感覚の互換性や統合性をいかした実践が見られる。ただ、鑑賞領域では、視覚優位の方法に比重がおかれ、視覚と他の感覚を複合的に働かせる教育法の開発は十分でない。

そこで本研究では、原始的で低位な感覚とされがちな嗅覚に注目した。神経科学等では、嗅覚が複数の感覚と結びつき影響を与える、匂いが他の感覚以上に記憶や思考との繋がりをもつ等の知見がある。そこで嗅覚刺激が鑑賞における記憶や思考を促進するのではないかという仮説を立て、研究目的を、標題にあげる美術鑑賞教育法の開発とした。

現段階では基礎研究として、嗅覚刺激と視覚との相互作用(記憶・思考の様相)を把握するための実践研究を行っている。その一つとして、香水という嗅覚刺激(香り)をもとにした視覚化作業、具体的には香水瓶のデザインおよび立体表現を通して、嗅覚刺激による視覚的イメージが美術的な固有の次元をもっているのかどうかを調査している。そしてそのような実践研究を通して明らかになってきたことは、香りそれ自体が嗅覚作用によって視覚化(イメージ化)されるというよりは、嗅覚と視覚の間に表現者固有の経験知や知識、感性、概念、生活体験、過去の記憶といった要素が影響し(もしくは媒介)、新たな視覚的イメージが創出される点である。

次の段階では基礎研究をふまえ、実際に美術鑑賞教育法として実践できる方法論を構築、実践、仮説検証していく予定である。

個人研究

ダンス教育で育てるからだを問う
～ソマティクスとボディ・ワーク
のかかわりから研究代表者・教授 原田 奈名子
(体育科教育学)

本研究は、基盤研究 (C) (一般) 2017 年から 2021 年までの 5 年間、他 2 名と行っている。本報告は 2018 年度について行うものである。

代表者である原田は、2019 年 3 月に「舞踊・ダンスにおける『からだ観』・『舞踊観』」を発表した (舞踊教育学研究 20 号: pp 13-24)。それは前年度の「表現運動・ダンス領域における『からだ』を考える」シンポジウム報告 (舞踊教育学研究 19 号: 50-51) をたたき台に以下の観点でまとめたものである。ひとつは、ダンスの授業でどのようなからだを育てようとするのかを問うであり、もうひとつはダンス授業に限らず舞踊する身体に望まれる“身体の在りよう”、言い換えれば訓練法にも言及している。

村越は、臨床教育学の立場から舞踊教育とソマティクスおよびボディ・ワークの分野を担当し、ソマティクスとダンスのつながりをそれら実践と思想を系譜としてまとめ博士論文を提出し博士号を取得した。

大橋は、スポーツ哲学会にて「ダンスの授業における『学び』を問うーソマティクスとボディ・ワークのかかわりからー」を発表した。

2018 年 11 月に台湾国立台東大学教授である劉 美珠氏 (ソマティクスの Ph.D) を招いて研究会を開催し、他大学からの参加者のフィードバックを材料に研究遂行した。昨年度、福本まあや氏 (お茶の水女子大学) を招いて研究会をした際、語の概念が少しずつ異なるという指摘を受けた。美珠氏の講演はそれを再認するものになった。

個人研究

認知症患者との「関係性」
についての新モデルの構築と展開
ー「主体」論を超えて研究代表者・特別研究員 翁 和美
(社会学・文化人類学)

本研究は、同時代の異なる社会における酷似する介護実践の意味づけを比較することで従来の介護論から「相互了解世界アプローチ」へと認知症患者に対する介護モデルを刷新する道筋を示すことを目的としている。「相互了解世界アプローチ」の実践が正当に評価されていない A 介護施設 (仮名) と高く評価されている B 介護施設 (仮名) とそれらがある社会を比較対象としている。

2018 年の調査から、介護施設内におけるプライベートとパブリックの関係性ならびに各介護施設がある社会におけるプライベートとパブリックの概念の相違が、開放性の違いと施設介護と家族介護の価値づけの違いを生み、開放性が高く家族介護の上位に価値づけられる施設介護という A 介護施設のあり方はその複雑性ゆえに評価されにくいという仮説を得た。一方、実践の継承という本研究の目的と大きく関わる新たな課題も見えてきた。A 介護施設の実践は B 介護施設の実践よりも歴史が長いことから、実践の継承の有無とその条件を見ることでも、本研究の目的の一端を明らかにすることができるのではないかと課題である。そこで、2019 年の冬から初春にかけて A 介護施設でインタビューを交えた参与観察を実施した。

A 介護施設の調査では、上記仮説の検証を行なった。一方、「相互了解世界アプローチ」が継承される最低限の要件は、A 介護施設の創設者である医師と手を携えて「相互了解世界アプローチ」を行なった経験であることがわかった。「相互了解世界」という舞台装置にとって、舞台監督が医師である場合にのみ、認知症患者を「病気」の存在として固定し、その行動の抑制を志向する医学・医療的視座に対する対抗言説を作り上げることの正統性が介護・看護従事者に与えられ、舞台装置の基礎が整うのである。引き続き、B 介護施設がある社会におけるプライベートとパブリックの関係性と医学・医療的視座の影響力について調査を進める。

個人研究

「黒ノート」に依拠したハイデッガーの
ナチズム問題の再検討
—メタポリティックを軸に—

研究代表者・元特別研究員 田鍋 良臣
(宗教哲学)

2018年度はまず、前年度の研究のなかで浮上した、「人種」をめぐるフライブルク大学総長期（1933-34年）のハイデッガーの思想を整理・分析した。その成果は、おおよそ以下の4点にまとめられる。①ハイデッガーは、ナチズムの人種主義を生物学主義的な人間理解だとして批判する一方で、②実存論的な身体論の観点から、人種概念の捉え返しを試みる。③だが実存論的な人種概念といえども、民族にとっては「必要条件の一つ」とどまる。④いわゆる「存在史的反ユダヤ主義」をめぐる問題の一端は、ハイデッガーの人種論に関する以上の論点が整理されていないことに起因する（田鍋良臣「ハイデッガーの人種論——総長期の思索を中心に」、日本現象学会第40回研究大会、2018年11月、於東京大学）。

さらに、「存在史的反ユダヤ主義」というトラヴェニーの主張の妥当性を検証するため、1930年代後半から1940年代にかけての資料を手がかりに、ハイデッガーの存在史的思索における「反ユダヤ主義」の位置づけを試みた。その結果、ハイデッガー自身の想定する反ユダヤ主義とは、その「反」の構造上、ユダヤ教に捕われざるをえない「単なる反動」であることが明らかになった。他方でハイデッガーが定位する「別の始源」は、ユダヤ（＝キリスト）教、およびそれと結びついた形而上学の歴史の外部にあたる。このことから、存在史的な視座に依拠した「黒ノート」のユダヤ批判は、ハイデッガーの立場からすれば、単なる反動（＝反ユダヤ主義）とは原理的に言えず、むしろ形而上学の歴史を画定しつつ別の始源への移行を準備する、いわゆる「形而上学の超克」の一側面とみなすことができる（田鍋良臣「ハイデッガーの「反ユダヤ主義」について」、日本宗教学会第77回学術大会、2018年9月、於大谷大学）。

今後は、引き続き先行研究の問題点を精査するとともに、形而上学の超克の観点から、「黒ノート」のユダヤ批判の内実を検討していく。

個人研究

19世紀フランス誌における宗教的混淆
—教育から文学創造へ—

研究代表者・非常勤講師 塚島 真実
(フランス文学)

本研究は、高踏派からランボーにいたる作品におけるヘレニズムとキリスト教の混淆を明らかにすることを目的としている。

19世紀前半にロマン派の詩人たちが謳った、使徒やギリシア・ローマ神話の神といった神的・超人的形象に擬えた詩人像は、世紀後半になって変質を被る。民衆に対する啓蒙の意図は生き続けるが、高踏派は自己投影の対象ではなく客観的描写の対象としてギリシア・ローマ神話に多くその題材を求めるようになり、術学的な色合いの濃い作品も生まれた。そのため本研究は、詩人個人の内面ではキリスト教信仰が命脈を保ちつつも、詩において異教神話が流行するという一見矛盾した状況の背景を明らかにすることを目的とした。

2018年度はフランスでの資料調査をフランス国立図書館で行った。初期のランボーや高踏派の詩作品に特徴的な異教神話の形象の描写の源泉として、日本に所蔵がなくデータベースにもない1860年代から1870年代の学校教材の文献調査を進めた。ランボーの詩学において有名な「わたしとは他者である」の言はデカルトの「われ思う、故にわれ在り」のもじりであるとされているが、今回調査した哲学選集にこのデカルトの文章が載っていた。この文献の分析を進めることで、ランボーの詩の哲学的側面の源泉の一端を明らかにすることが期待される。また、文学作品選集に加え、修辞学、小論文（Dissertation）、手紙の書き方等、より明確で個別の目的をもつ教材の調査にも着手した。こうした教材の分析は、間テキスト性だけでなく、より内在化された文体の側面からもランボーの詩的個性の基底にある多様性を明らかにするのに役立つ。

また、バンヴィルについては詩だけでなく、散文作品や文芸・美術批評に読解の対象を広げたことにより、これまで研究テーマにあった神話的形象の表象の対蹠点に位置するリアリズム表現について考察する契機を得た。

個人研究

東南アジア大陸部で発展した
積徳行文献の体系解明

研究代表者・特別研究員 清水 洋平
(仏教学・南伝仏教)

本研究の目的は、16～19世紀の東南アジア大陸部：特にタイで発展し、独自に編纂された積徳行という宗教的実践を勧奨する文献：アーニサンサを考察し、①ほとんど知られていなかった同文献群の全体像を把握すると共に、②伝統的パーリ仏典（正典としてのパーリ三蔵及びその註釈文献）と対比・校合しアーニサンサ文献のパーリ仏典史上における変遷・発展の体系的解明をおこなう。

- (1) 前年度までに整理し構築した「アーニサンサ」(積徳行) 文献(貝葉写本) グループ(約35種230束：1束は約24葉)のデータベースを活用して、タイ仏教の特徴的な現実相との対応が明らかな本研究に適する代表テキストをいくつか選定した。その中で、本年度はクメール文字パーリ語で記された一束からなる *Sabbadāna-ānisaṃsa* を取り上げ、同テキストをローマ字に転写する作業をおこない、文献研究に取り組んだ。同テキストについては、クメール文字タイ語で記された複数のバージョンが存在することが判明した。
- (2) エディション作成等、代表として選定したテキストの精緻な文献研究をおこなうためには、手持ち資料の充実を図ることが必要不可欠である。よって、2018年9月には、バンコクに所在する第一級王室寺院 Wat Suthat, Wat Ratchabophit, タマユット派の総本山である Wat Bowonniwet、並びにラヨン県に所在する Wat Khottimtharam などに関連資料の調査を実施した。2019年3月には、バンコク所在のタイ国立図書館などに赴き、関連資料の調査を実施した。
- (3) これらの作業に加え、本年度は、5月に「タイの絵付き折本紙に引用される読誦経典の意味合い」と題した発表(第32回パーリ学仏教文化学会)をおこない、当該研究の現在までの研究成果を交えた報告をおこなった。

個人研究

『甚深伝』校訂と解析による
ミラレーパの仏教思想の解明

研究代表者・特別研究員 渡邊 温子
(仏教学・チベット学)

本研究の最終的な目的は、ミラレーパの仏教思想を再構築し、彼の思想を解明することである。それにより、チベット仏教後伝期における仏教開花についての基盤研究を提供する。上記の目的を達成するために、現存する諸ミラレーパ伝の原型である『甚深伝』を研究対象とし、現在入手・閲覧可能な写本を用いて①校訂本の作成、および②翻訳研究を通じた文献分析により新たな研究モデルを構築する。

①校訂本の作成に向けて、北京で出版された活字本『甚深伝』を底本として、テキストの入力作業と確認作業が完了した。②『甚深伝』の後半の翻訳を継続中である。意味を確定することが難しい部分が多いため、ツァンニョン・ヘルカの『ミラレーパの十万歌』を参照し、チベット・日本のチベット学研究者に確認しながら翻訳を進めた。

個人研究

生活困難状況にある若者への
離家支援としての共同生活型支援
の実態及び有効性の検討

研究代表者・講師 岡部 茜
(社会学・社会福祉学)

本研究は、現在の共同生活型若者支援の実態を把握するとともに、社会福祉学で蓄積されてきた施設での生活支援の視点から、その有効性を検証することを目的としている。2018年度は、①共同生活型の若者支援を実施している団体の資料を収集し、資料から推察される事項を整理すること、②全国の共同生活型若者支援の実践者に事業に関するインタビューを実施すること、の二つの課題に取り組んだ。

2000年以降に「若者問題」として注目されたニート・ひきこもりなどの若者への支援として、2005年から若者自立塾事業が実施された。これは、共同生活のなかで生活支援と就労支援をともに提供するものであり、他国の若者支援政策と比較しても珍しい取り組みであった。しかし、2009年度末に本事業は廃止さ

れ、当時、各地で展開されていた取り組みは徐々に減っていった。①の取り組みとして、まずそうした若者自立塾を受託した団体について書かれた書籍や論文等から、推察される共同生活型若者支援の課題と有効性を抽出した。これについては、2018年の日本社会福祉学会にて口頭報告をおこなった。

その検討を踏まえたうえで、②のインタビューとして、若者の入居理由、家族背景、負担金額、事業プログラム等を聞き取っている。この聞き取りからは、若者自立塾事業を受託していた団体と、その制度の後に取り組みが開始された団体とでは、活動スタイルや目的がやや異なっていること、ルールの厳密さや部屋割りなどはその団体の用いている住居構造に大きく影響を受けていること、ルールは寮生とスタッフの日々のやり取りのなかで柔軟化していくこと、地域行事への参加がどの団体でも共通して重視されていること等を読みとることができる。インタビューは2019年度も継続中であり、さらに分析を進めていく予定である。

個人研究

空海の遺志に立ち返る碩学たち： 近世後期の「根本説一切有部律」 研究

研究代表者・元任期制助教 岸野 亮示
(仏教学)

インドからチベット文化圏と漢字文化圏の双方に伝わった唯一の戒律テキストとして学術的な注目度が高く、また日本においては、空海(774-835)がひそかに重視したことで今日まで仏教界にも少なからず影響を与えている「根本説一切有部律」という律テキストの包括的な研究の実現に向けて、近代仏教学が導入される以前の近世後期の日本の学僧たちの同律に対する研究成果を網羅的に収集・参照することが本研究の大きな狙いである。その狙いのもと、本年度は空海の意向に基づき江戸時代の後期において「根本説一切有部律」の宣揚運動を展開した学僧の一人である學如(1716-1773)の著作・編纂物に焦点をあて、彼が住職を務めた金龜山福王寺(広島市可部町)において資料調査を三度おこなった。結果、関連資料7点(義浄訳『律攝』5部14巻、學如撰『根本有部律受戒法儀』1部1巻、學如撰『安居並随意作法』1部1巻、學如撰『小部類集・上下』2部2巻、學如撰『有部律羯磨』1部1巻、學如撰『篇聚集』1部1巻、撰者不明『南海寄帰内法伝引摺・下』1部1巻[下巻のみ現存])

を確認・実見した。またそれらのテキストデータも入手した。またかねてより本研究の代表者が解読を進めている『Vinaya-samgraha』というチベット語訳と義浄(635-713)訳で現存する「根本説一切有部律」の綱要書(Tib. 'Dul ba bsdus pa; Chin. 根本薩婆多部律攝)の研究において、福王寺に所蔵される學如自身が編纂・出版した義浄訳の『Vinaya-samgraha』の版本も新たに参照することで『Vinaya-samgraha』研究をより情報量の多い有益なものに示えた。そして上記の成果の一部を二回の学術大会(大谷大学仏教学会研究発表例会、日本印度学仏教学学会第69回学術大会)において発表し、さらに一本の英語論文にまとめて投稿した。

個人研究

農業奉公の歴史社会学的研究 —労働を通じた社会的包摂 に着目して

研究代表者・任期制助教 阿部 友香
(社会学・農村社会学)

本研究は奉公というローカルな労働慣行とイエの論理の間で、昭和初期の地域社会において、いかにして社会的包摂の実践はなされていたのかを明らかにすることを目的とする。

第二次世界大戦前後は、近代の諸制度が現在の形に再編される時期であり、社会保障制度もまた大きく変化していった時期である。一方で、医療化・施設化の浸透に伴い、現在「障害者」とされる人びとが地域社会から不可視化され、「ケア」の対象となっていた時期でもある。労働慣行のひとつである奉公は、山形県庄内地方の事例より、即戦力の若者が循環する仕組みの一方で、周縁的な人びとの受け皿でもあった。つまり、奉公慣行は福祉が未整備な時代にあっては、農村における周縁的な人びとに対し生業と地域社会での正当な役割・居場所を与えるものでもあった。

現在「農福連携」として注目される取り組みに本事例は類似した部分をもつが、本研究では福祉的な観点ではなく、イエ・ムラ研究の立場から周縁的な人びとの生業のあり方を考察する。対象地域は若勢慣行が広く見られた山形県庄内地方とし、高齢者の口述データを用いて、特に障害者などの周縁的な人びとと農業奉公慣行とのかかわりに焦点を当てる。

これまでの庄内北部の調査から、恒常的な雇用労働力として障害者の若勢が存在していたことが明らかに

なった。現在の農福連携の事例研究で確認されているように、農作業場面では作業の細分化・単純化が工夫されており、その采配は親方ではなく現場の奉公人同士でなされていた。また、主力の若勢と障害をもつ若勢との「連帯」ともとれる事例もあり、庄内の若勢の相対的な自立性が、障害者を含む奉公人と主家との関係性全般に影響を与えていたと考えられる。

個人研究

ソーシャルアクションの 国際比較研究

研究代表者・准教授 中野 加奈子
(社会福祉学)

2018年度は、(1) ソーシャルアクションの国際比較研究-日本、東アジア、南欧、(2) 進歩的 (Progressive) ソーシャルワークの発展に向けた東アジアとの共同研究、という二つのテーマに取り組んだ。(1) については、スペインでの調査 (8月) を実施した。スペイン調査の結果については、研究所報 No.73 で報告した通りである。

次に、(2) については2019年2月に香港の研究者・実践者・学生にソーシャルアクションに対する考えや取り組み状況についてヒアリングした。2015年の雨傘運動の後、「運動しても、何も変わらない」と絶望し数年引きこもった若者が、大学へ再入学しソーシャルワークを学び始め、「あきらめずにアクションに取り組みたい」と語っていた。また、身近な社会問題に関するイベントを企画し啓蒙活動に取り組む学生グループに出会うことができた。そして、こうした学生自身の取り組みを、研究者たちが適切にスーパーバイズしていた。研究者自身も実践経験のある者が多く、多様なソーシャルアクションの経験を持つ。したがって、その指導は具体的な内容となっていた。

一方で、香港においてもソーシャルアクションに積極的に取り組む者は一部である、と指摘する実践者もいた。特に公的な部門に所属するソーシャルワーカーや研究者にとっては、政府に反対する意見を述べるのが難しい、とのことであった。制度改正を訴えるには、政策主体に対して意見を述べる必要があるが、「権力との向き合い方」は各国のソーシャルワークが直面している問題のように思われた。

ヒアリング後、香港の民主化運動は激化し、ヒアリングした学生・研究者・実践者たちも運動の最前線で活動をしている。ソーシャルワークのグローバル定義

では社会正義や人権、多様性の尊重はソーシャルワークの中核となる、と述べられているが、こうした民主化運動とソーシャルワークの関係についても、今後検討をしていきたい。

個人研究

ユネスコ「世界の記憶」ヨーロッパ 最古の公共図書館の成立： 利用者の観点から

研究代表者・教授 山本 貴子
(図書館情報学)

今年度は、マラテスティアーナ図書館と同時代にイタリアで設立されたといわれる図書館のうち、マラテスタ・ノヴェッロと関係のあったメディチ家の図書館を調査した。2019年2月11日(月) - 2月20日(水)に、サン・マルコ図書館及びラウレンツィアーナ図書館を訪問した。

サン・マルコ図書館は、コジモ・デ・メディチが、1452年、サン・マルコ修道院内に設立したものである。一般市民に公開された図書館だといわれているが、現在、備品類も資料も取り払われ内装は修復されているので、当時、どのような状態だったかは文献に拠ることしかできない。また、ここには研究室がなく、この図書館について調査することができなかった。

一方のラウレンツィアーナ図書館は、サン・ロレンツォ聖堂附属図書館であり、設立にはロレンツォ・デ・メディチが中心に関わった。この図書館は、内装などが当時のままに残されており、また、研究室があったので、研究者にこの図書館とサン・マルコ図書館について話を聞いた。ただ、ノヴェッロとの関連はわからなかった。

そこで、国立中央図書館 (フィレンツェ) とフィレンツェ文書館で資料を探索した。すると、フィレンツェ文書館で、ノヴェッロがメディチ家に宛てて書いた手紙を見つけることができた。

具体的には、1454年8月から1464年5月まで、約10年間に11通送られている。内訳は、コジモ宛に4通、ジョバンニ宛に6通、ロレンツォ宛に1通である。(なお、ジョバンニの妻やピエロの妻などの宛名も含まれているが、今回は代表者の名前のみ記した。)

今までの研究で、ノヴェッロとコジモの間で、写本を作るために資料を貸し借りしたということがわかっ

ている。これらが解読できれば、その詳細がわかる可能性がある。仮に、チェゼーナにこれらの手紙への返事が残っているとすると、さらに深い関係がわかることになる。

海外学会参加・研究調査報告

第19回国際真宗学会大会 (19th Biennial Meeting of IASBS) 参加報告

国際仏教研究 (英米班) 研究員・教授 加来 雄之

国際仏教研究 (英米班) よりマイケル・J・コンウェイ研究代表者、井上尚実嘱託研究員、加来雄之研究員の3名が2019年5月24日(金)より同26日(日)までの3日間にわたり、台湾・新北市金山の法鼓文理学院 (Dharma Drum Institute of Liberal Arts, DILA) において開催された第19回国際真宗学会大会に参加した。

国際真宗学会 (International Association of Shin Buddhist Studies、略称はIASBS) は、1982年に創設された浄土真宗の研究を目的とした世界的な学術団体であるが、近年は広く浄土教研究の学会となっており、今回も日本の浄土宗からの参加者があった。現在の事務局は龍谷大学内にあり、会長は嵩満也 (龍谷大学教授) である。本学会は、1983年より2年に一度、日本もしくは海外において学術大会を開催している。今回の大会は、法鼓文理学院仏教学系の鄧偉仁 (Weijen Teng) 副教授の尽力によって台湾で開催することができたが、日本以外のアジアでは初めての大会となった意義は大きい。

会場となった法鼓文理学院の経営母体である法鼓山は、曹洞宗に属する仏教系団体であり、現在の台湾で活動する主要な仏教宗派 (五山) の一つである。学院は、新北市金山に位置する自然豊かな山中にあり、大会は開放感と清潔感にあふれる近代的な施設のなかで行われた。また開催校からは参加者に安価なドミトリと素食 (精進料理) が提供された。

今大会のテーマは英語では、“Buddhist Meditative Traditions and Contemporary Pure Land Thought”、中国語では《佛教禪修傳統與當代淨土思想》、日本語では「仏教と瞑想と現代の浄土思想」である。これまでの真宗学会ではあまり注目されなかった「禪修伝統」もしくは「冥想」が取り上げられたことは、台湾仏教の現状と関心が反映されたものといえよう。

本大会では、6つのセッションと、2つのパネルが提供され、次の日程で開催された。

1日目は、開会式ののち、15:15~17:00に、Session 1「Shin Buddhist Thought in the Early Modern Period」が実施された。

2日目の9:00-10:30には、Session 2「Oversea Activities of Shin Buddhism」が、0:45~12:15には、2会場に分かれて Session 3「Life Story of Shinran」と Session 4「Meditation, Training, and Religious Experience」が実施された。Session 3においては、真宗総合研究所東京分室の大澤絢子が“The Process of Constructing the Couple Image of ‘Shinran—Eisin-ni’ in the Japanese Modern Period”を発表した。13:15-14:45には、同じく2会場に分かれて Session 5「On Meditation and Hōnen」と Session 6「On Meditation and Practice」とが実施された。Session 5では、日本浄土宗研究所から参加した2名に加えて、井上研究員が“Shinran’s Criticism of the ‘Transfer of Merit’ as Self-Powered Practice”を発表した。

15:00-16:45には、嵩教授のコーディネイトによる Public Panel 1「The Future of Collaborative Buddhist Studies among East Asia and the West」が開かれ、仏教研究について東アジアと西洋とがどのように協力できるのかという課題のもと、今後の国際真宗学会のあり方も含めた活発な議論がなされた。井上研究員もパネリストの一人として提言を行った。

また17:30~18:30には、前会長ケネス田中 (武蔵野大学名誉教授) による公開講演 Public Keynote Lecture「“The Role of the Visualization Sutra in the Formation of Pure Land Practice in China: Visualization and Recitation”」があった。その後、レセプションにおいて台湾の伝統的な素食 (精進料理) が振る舞われ、会員による懇親がなされた。

第3日は、9:00-10:50には、大谷大学国際仏教班による公開パネル2、Public Panel 2「Problems and Possibilities for the Spread of Shinran’s Thought in Contemporary Global Society」が提供された。このパネルは、本学の真宗総合研究所国際仏教研究班が企

画し、加来雄之がコーディネーターをつとめた。このパネルでは、日本文化の伝統の外（台湾、中国、ドイツ、アメリカ）において親鸞の思想に出会った4人のパネリストによって、今日のようなグローバル社会において親鸞思想の伝播がどのような課題と可能性をもつかという課題のもと下記の発表がなされた。

1. 陳 敏 齡 (CHEN Minlin 輔仁大學宗教學系兼任教授) “The Problems and Potential for the Spread of Shinran’s Thought in Global Society: The Encounter between Shinran’s Thought and Chinese Buddhism” 「親鸞思想と中国仏教との出会い」 「親鸞和中國佛教的會遇」

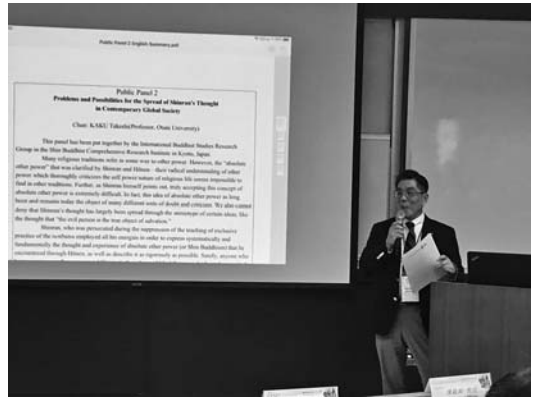
2. 森村 森 鳳 (MORIMURA Rinho, Professor, Doho Univesity) “The Profound Significance of ‘Made to Become So By Itself’ (*Jinen*) in Shinran’s Thought” 「親鸞における「自然」の奥義」 「亲鸾思想中的“自然”之奥义」

3. 邁克爾 康威 (Michael Conway, Lecturer, Otani University) “The Limitations of the English Translations of the *Kyōgyōshinshō* and the Need to Create an English Language Commentary on the Text” 「『教行信証』の英訳の限界と英文注釈書作成の必要性について」 「關於《教行信証》英文翻譯的界限及寫成英文註釋書籍的必要性」

4. 馬庫斯 呂施 (Markus Ruesch, Visiting Researcher, Ryukoku Unviersity) “The Potential of Biographies on Shinran: Examples for Interreligious Dialogues and the Possibility of Intercultural Dialogues” 「親鸞伝のポテンシャル：宗教間対話の事例と文化間対話の可能性」 「親鸞傳的潛能：宗教間對話的事例和文化間對話的可能性」

それぞれの発表者から興味深く有意義な提言がなされたが、コーディネーターの力量不足もあり、会場からの質問時間がとれなかったことが残念であった。このパネルについては今後、研究成果としてまとめる予定である。

この後、閉会式が行われ、希望者にエクスカージョンが提供された。大会終了後、大谷大学の発表者を中心に、台湾で善導流浄土教を伝えるため中華浄土宗協会を立ち上げた釈慧浄師と懇談の会をもった。師は、かつて本願他力教を学ぶために日本に留学し、大谷大学においても聴講していた。



パネルの様子

本大会は主として1会場でなされる小規模なものである。だからこそ3日間にわたり欧米や台湾の研究者ときわめて近い距離で、さまざまな研究関心・研究方法にふれ、ともに討議することができ、そのことによってグローバル化する世界の中で、親鸞によって示された真実がどのような位置をもつのかを見つめ直すきわめて有り難い機会となった。

大学の授業実施期間ということもあり、研究員は、その日のうちにそれぞれ帰国の途に着いた。大谷大学からは、助教・浦井聡や数人の大学院生など若い研究者たちが個人参加した。彼らは、学院が用意したドミトリに3日間滞在したことによって、各国の研究者や学生と緊密な親睦をもつことができたと聞いている。とくに大会の運営に協力した台湾の学生、学院の僧侶および、法鼓山の信者がたの真摯な対応は心温まるものがあつた。紙面をかりて感謝したい。



大谷派の開教従事者と大学院生とともに

中国社会科学院歴史研究院古代史研究所との 学術交流協定に基づく公開研究会報告

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授 井黒 忍

大谷大学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究院古代史研究所との学術交流協定に基づく共同研究の一環として、2019年9月16日(月)に同院において研究報告を行った。報告者と題目およびその概要は以下の通りである。

浦山あゆみ教授は「『大唐三蔵取経詩話』における“兔”」という題目の報告を行った。本邦で発見された孤本『大唐三蔵取経詩話』の第四回にみえる語“虎狼虺兔”は、荒野に出没する四種の動物、すなわちトラ・オオカミ・ヘビとウサギであるとされ、これまで疑問視されることはなかった。ところが前後の文脈から分析すると、ここの“兔”はウサギではなく、人に危害を加える凶暴な生物であったほうが話の展開の上、整合性がある。ところが『大唐三蔵取経詩話』と『大唐三蔵取経記』を校合しても、また、『大唐西域記』や『慈恩伝』など玄奘と関連のある書にみえる“兔”の例も、さらには漢訳仏典に出現する“兔”の用例でも、いずれも“兔”が誤字ないしは別の漢字の異体字である証左に乏しい。月兔あるいは亀毛兔角や三獣渡河の“兔”などの例が多く、やや悟りが浅い者の比喩としてのウサギがよく使われる例であって、人を脅かす動物とまでは言えないことがわかる。ただし、漢訳仏典の中には“蛇(虺)虫”とされる例を見つけることができる。“虫”は『説文』にもみえる漢字で音はキ、ママシのことである。これらより“兔”は実は“虫”の可能性が高いと考えられる。また“虫”のちには“蟲”(音チュウ)の俗字として使用されるようになったため、『大唐三蔵取経詩話』ではすなわちムシ(おそらくサソリなど有毒害虫)と解釈することも否めないことを示した。

井黒忍准教授は、「女真と胡里改－鉄加工技術に見る完顔部と非女真系集団との関係」の題目にて報告を行い、完顔部勃興の内在的要因の一つとして、鉄資源とその加工技術の確保という問題を取り上げた。鍛鉄を業とする職能集団であった胡里改は、渤海発祥の地である敦化地方を根拠地とし、鉄製武具の製造および販売を半ば独占的に行った。胡里改は自らを女真とは異なる集団であると認識し、牡丹江流域から図們江下流域に至る地域の諸集団と結び、完顔部への侵攻を繰



社会科学院での報告の様子(浦山教授)

り返した。完顔部は遼の権威を利用しながら、耶懶部から日本海沿岸部の集団を取り込み、南北からの挟撃によって反対勢力の打倒に成功する。胡里改らを吸収し、鉄資源とその加工技術を手に入れた完顔部は、東北アジアの諸集団を統一し、金の建国を成し遂げる。完顔部の前に敗れた胡里改であったが、金代には牡丹江流域、松花江中流域および黒龍江下流域の広大な土地にその名を冠した胡里改路という行政区画が設けられ、元代には同地域の女直を管轄する軍民万戸府の一つとして胡里改万戸府が設置される。さらに明代には松花江上流域および図們江流域へと移住し、後にヌル



社会科学院での報告の様子(井黒准教授)

ハチを出だすこととなる建州女直を構成するなど、12世紀から17世紀に至るまで東北アジアの地に足跡を

残し続けた稀有な集団であったことを明らかにした。

ロンドンにおける紋章の文献及び 実態の調査報告

一般研究（柴田班）研究代表者・教授 柴田 みゆき
同 協同研究員・非常勤講師 杉山 正治

研究代表者は、社会における様々な関係性を PC 上で簡便に表現する手法について、様々な分野の研究者達と 2006 年から協同で研究している。2019 年度は『系図・紋章からみる画像記号と文字データの同定・管理・可視化および表現手法の研究』と題する研究が大谷大学真宗総合研究所に採択され、日本とイングランドの社会における人間の関係性の表現手法について研究を進めている。

本研究班では 2019 年 9 月 9 日(月)から 13 日(金)まで、ロンドンにおいて (1) 紋章情報の文献調査、(2) 系図情報の実地調査、(3) 紋章利用の実態調査、の 3 点の調査を行った。調査に従事した班員は、研究代表者の柴田みゆきと協同研究員の杉山正治の 2 名である。以下にその成果を報告する。

(1) 紋章情報の文献調査

大英図書館 (British Library) において、9 月 9 日(月)と 10 日(火)、13 日(金)の 3 日間に渡り、紋章に関する文献調査を行った。今回は、1700 年代から 1800 年代に出版された未デジタル化資料及び館内アクセスのみの資料を中心に調査した。この結果、紋章において家族の基礎情報に個人の情報が増減する具体的な事例を得ることが出来た。

さらに、9 月 12 日(木)に英国国立公文書館 (The National Archives) において、紋章およびブロンプトン墓地に関する未デジタル化資料の調査を行い、今回は 1908 年に同墓地の補修計画の契約書等の資料を得た。著名な初期埋葬者の情報と照合する事で、紋章に対する意識の変遷を理解する傍証となりうる。

上記 2 箇所から収集したデジタル資料の整理と分析を今後行い、制作中の系図表示ソフトウェアの改良に繋げる予定である。

(2) 系図情報の実地調査

ブロンプトン墓地 (Brompton Cemetery) において、9 月 10 日(火)に実地調査を行った。同墓地は、産業革命期に民間資本を導入して作られた 7 つの巨大墓地群の一つであり、唯一、王立公園 (The Royal

Park) に属する公園墓地でもある。同墓地には、カタコンブの他にも地上部分に多数存在する一般人の墓に混じって、紋章を持ちうる称号を持つ人間も埋葬されている。

そこで、本研究ではイングランドにおける教会内部以外での紋章調査の場として、ブロンプトン墓地を選定、調査を行うこととした。調査の結果、いくつかの霊廟において紋章が掲げられていた可能性のある部分を見つけることが出来た。しかし、同墓地は第二次世界大戦期に爆撃の被害を受けており、欠損が多く見受けられる。杉山協同研究員の撮影による高精細の写真資料を多数得たので、資料の整理と分析を今後行う予定である。

(3) 紋章利用の実態調査

2019 年 9 月 11 日(水)に大英博物館 (British Museum)、同 9 月 13 日(金)にヴィクトリア&アルバート博物館で、紋章を利用した事物の実態調査を行った。前者は個人のコレクションを母体として、後者は若者の芸術教育を目的として設置されている。その設置目的の違いが、文物にあらわれる紋章の取り扱いの違いに現れることがわかった。両博物館で得たデジタル資料の整理と分析を今後行う予定である。



ブロンプトン墓地入口 (杉山協同研究員撮影)

第19回国際真宗学会 (International Association of Shin Buddhist Studies) に参加して

東京分室 PD 研究員 大澤 絢子

2019年5月24日(金)から26日(日)まで、台湾の法鼓文理大学 Dharma Drum Institute of Liberal Arts にて開催された第19回国際真宗学会にて研究発表および最新の研究動向の調査を行った。

1982年に創設された国際真宗学会は、浄土真宗と浄土教に関する研究を中心とした学会である。これまで2年ごとに、ホノルルや東京、パークレー、京都などの主要都市で大会が開催されてきた。第19回の本年度は、新北市に位置する法鼓文理大学を会場に、初めて台湾での大会開催となった。

本大会は、6部会に分かれ、それぞれ Shin Buddhist Thought in the Early Modern Period、Oversea Activities of Shin Buddhism、Life Story of Shinran、Meditation, Training, and Religious Experience、On Meditation and Hōnen、On Meditation and Practice をテーマとする報告が行われた。各部会では、前近代の浄土真宗の思想、浄土真宗の海外での展開、親鸞の伝記、法然の思想を中心に議論が行われただけでなく、近年さまざまな国や地域で注目が高まっている瞑想 Meditation に関する報告が多数なされたことは、本大会の特徴と言えるだろう。浄土真宗の伝統と瞑想を用いた修行のあり方は距離があるものの、現代社会における仏教受容の諸相としてその実態や実践は無視できないものであり、将来的な仏教の展開に関する活発な議論が行われた。

パネル報告としては、The Future of Collaborative Buddhist Studies among East Asia and the West および、Problems and Possibilities for the Spread of Shinran's Thought in Contemporary Global Society と題した報告がなされた。前者のパネルでは、東アジアと西洋間での仏教研究を今後いかに進めていくかについて議論がなされ、現在進められている、近世の『歎異抄』解釈の英訳の試みについての紹介もなされた。後者のパネルでは、主に親鸞思想の翻訳に関して、翻訳に伴う意味理解の困難さや親鸞の思想をさまざまな文化へ伝える際の課題が浮き彫りにされた。

報告者の研究発表としては、The process of constructing the couple image of "Shinran—Eisin-ni" in the Japanese modern period と題する報告を行い、メディアを通して構築された親鸞と恵信尼の夫婦イメージが近代的な家族観・女性観に影響を受けていること報告した。質疑の際に議論となったのはまず、親鸞の史実を明らかにする近代実証主義にもとづく歴史学と親鸞を題材とした文学の相互作用の可能性である。現代において親鸞は、恵信尼と夫婦として語られる傾向にあり、その夫婦愛が語られる。このイメージは主に文学の場で形成されてきたが、歴史学の側もこうしたイメージに影響されて検証を重ねてきたと考えられ、この点についての意見交換を行った。

大正期以前、ほとんどの伝記は恵信尼ではなく玉日



研究報告と会場の様子



広大な敷地を有する法鼓文理学院

を親鸞の妻としており、親鸞と恵信尼の夫婦像は、近代の結婚観や坊守像の影響を受けて形成されてきたと考えられる。そのため質疑の際には、親鸞と恵信尼を良き夫婦として語り、また恵信尼を真宗寺院の住職の配偶者である坊守の理想的モデルとして捉える傾向がいつ、どのように行われてきたのかについての議論もなされた。本報告を通して、仏教における女性問題を研究テーマとする研究者とさまざまな意見交換を行うことで、東京分室の共同研究のテーマの1つである

「女性と仏教」研究を進めていくためにも貴重な機会となった。

その他、大会中にはケネス・田中氏（武蔵野大学名誉教授）による講演会“The Role of the Visualization Sutra in the Formation of Pure Land Practice in China: Visualization and Recitation”と題する報告も行われ、日本に限らず台湾やアメリカの研究者と交流しつつ、浄土真宗をグローバルな視点で研究する意義を改めて確認することができた。

第13回アジア太平洋ホスピス大会 (Asia Pacific Hospice Conference) に参加して

東京分室 PD 研究員 鍾 宜錚

2019年8月1日(休)～4日(日)にインドネシアのスラバヤにおいて開催された第13回アジア太平洋ホスピス大会(Asia Pacific Hospice Conference)に参加し、共同研究成果の一部をポスターで発表した。この国際会議は、ホスピスケアを中心に、アジア太平洋地域における医療関係者、研究者、ソーシャルワーカー、宗教者などが活動成果や理論的課題を議論し合う場である。2年に一度開催され、アジアだけでなく、アメリカやオーストラリアからもたくさんの参加者が集まるので、終末期医療の分野において規模がもっとも大きい国際会議である。

1日は小児緩和ケア、緩和ケアにおけるスピリチュアルケア、中華圏におけるホスピスケアの発展など、計五つのワークショップが開催された。英語、インドネシア語、中国語対応のワークショップもあり、母国語で自由に発言できるような環境を作る工夫に感心した。

2日は本会議の第一日目であった。初めに大会長である Dradjat R. Suardi 医師によるスピーチがあり、本会議の趣旨説明がなされた。続いて、スラバヤ市初の女性市長であるトリ・リスマハリニ氏による歓迎スピーチがあり、スラバヤという町の発展について紹介された。その後、アドバンス・ケア・プランニング(ACP)におけるコミュニケーションと瀕死状態における緩和ケアのあり方に関する大会講演があった。大会講演の後には、フロア発言も活発になされ、双方向での議論が進められた。

3日～4日は、「緩和ケアにおける諸問題」「非がん患者における苦痛管理」「集中治療室(ICU)及び救命救急センターにおける緩和ケアのあり方」「緩和ケ

アにおけるスピリチュアル的観点」「新生児緩和ケアにおける心理的・社会的観点」などホスピスに関連する多様なテーマについての分科会が開催された。鍾は、ポスター発表のため、初日午前にポスターを設置した。ポスターでは、日本と台湾におけるホスピスケアの発展に対する仏教の影響、とりわけ「無常」概念がいかに応用されたかについて説明した。個人の自己決定権が強調された医療倫理の原則に対し、「無常」概念から生じた「自然に身を任せる」や「受容」の考えが、仏教のホスピスケアに大きな影響を与えたという見解を示したうえで、教義の解釈による日本仏教および臨床宗教師の活動について説明した。日本の状況に対し、台湾にも「無常」の概念があり、終末期ケアに応用する場面もあったが、ホスピスの現場では、「無常」と「受容」の観点から、人生の最期における本人と家族との「和解」に注目したところが、台湾の臨床仏教の特徴だという点を解説した。

ポスターセッションの参加および発表を通して感じたのは、終末期医療における宗教の取り組みに関して、地域によって関わり方に差が出る、ということであった。日本のように、大学で研修を受けて、臨床宗教師という資格を取ったうえでスピリチュアルケアを行う方法がある一方、在家の信者が中心に、ボランティア活動の一環としてスピリチュアルケアを行う方法もある。仏教の概念の解釈についても、文化の差異によって生じた関心の違いや臨床的実践の有りに関しては、さらなる検討が必要だと感じた。今後の研究課題としたい。

本会議中には、台湾、中国のソーシャルワーカーやインドネシアの倫理学者、法学者と交流する機会を持

つことができた。ワークショップも含めて4日間の大会に参加し、緩和医療およびホスピスケアをめぐって多様な視点の存在を認識した一方、発展途上国の参加者からは、医療環境がまだ整えられていない中、ホスピスケアの意義と実施の目的が誤解されてしまうことがあり、医療従事者たちが無力感を覚えたとの声が印象的であった。また、大会ではホスピスケアの実施に関する教育的なセッションを設けており、人材育成にも力を入れていた。400人以上の参加者同士の交流の場であるとともに、ホスピスケアの発展がまだ初期段階の参加者に対する医療知識の伝達の場でもあると実感しつつ、この経験を生かし、終末期医療における倫理と宗教の役割について研究を進めていきたい。



大会参加の様子

調査報告：台湾社会における宗教者の役割について

東京分室 PD 研究員 青柳 英司

東京分室の共同研究「社会的価値観における宗教の役割の解明」では、2019年9月12日(木)から15日(日)にかけて、PD研究員3名(西村晶絵・鍾宜錚・青柳英司)が台湾を訪問し、同地の宗教が社会の中で果たす役割と社会的意義とを調査した。

調査対象として台湾を選定したのは、社会状況(都市化・少子化など)が日本と近似する一方、宗教者が社会に対して積極的な活動を行う例が多く、本研究に関する事例を集めるのに好適であると考えたためである。また台湾との比較を通して、日本の宗教の社会的役割の特徴や問題点が、明確になることも期待された。以下に、調査の概要を報告する。

9月12日：飛行機で台北に到着後、タクシーで市内の善導寺を訪ねる。同寺は、日本の浄土宗が戦前に

建立した寺院であり、念仏堂では日本で作られた仏像が現在も使用されていた。しかし、今では日本の浄土宗との交流はほとんどなく、教義や実践においても顕著な相違が見られた。これは台湾社会の宗教的要求に応じて、寺院の側が柔軟に変化した一例であると言える。

9月13日：台北から高雄に新幹線で移動後、バスで佛光山寺へ向かう。台湾の仏教界では、戦後に設立された団体が、社会に対して大きな影響力を有している。その中でも星雲法師が設立した佛光山は、海外にも多くの別院や道場を展開する国際的な団体であり、その本山である佛光山寺は、2000人を収容できる大雄宝殿をはじめ、多くの寺塔を有する台湾最大の仏教施設である。我々は初めに、ガイドの方案内で佛光



佛光山の妙凡法師と



同光同志長老教会の黃國堯牧師と

山佛陀記念館を見学。仏陀の人間性を強調する法話を拝聴した。さらに佛光山人間仏教研究院院長の妙凡法師にお会いし、お話を伺った。佛光山は社会实践を重視する「人間（じんかん）仏教」という理念を掲げており、その取り組みについて具体的にご説明いただいた。特に佛光山は他宗教との交流を重視しており、キリスト教や道教とも共同でイベントを実施しているという話は、とても興味深いものだった。

9月14日：高雄から新幹線で嘉義へと移動し、故宮博物院南分院において、インドや中国、東南アジアの仏教美術（主に仏像）を観覧する。東南アジアの玄関先である台湾にもたらされた、多様な仏教信仰の一端を垣間見ることができた。

さらに鍾研究員の叔父さんのご好意で、付近の媽祖廟を案内していただく。媽祖信仰は台湾古来の宗教であるが、そこには仏教や儒教などの他の宗教的伝統も融合されており、驚くほどの参詣者で賑わっていた。

その後、新幹線で台北に戻り、同光同志長老教会の黄國堯牧師に話を伺った。一般的にキリスト教は、LGBTの問題との親和性が、低く見られる場合が多い。しかし氏は、プロテスタントの牧師としてLGBTに対する偏見や差別の問題に取り組み、神の愛がLGBTか否かを問わずに平等であることを示し、対話を通して社会を変えようとされていた。

9月15日：午前中に台湾を飛行機で出発し、帰国した。

以上、台湾の宗教は社会に対して様々なはたらきかけを行い、価値観の形成に影響を与えると同時に、既存の価値観を変革しようとする役割も担っていることが明らかとなった。これに対して、日本の宗教と社会の関わりは、どのような特色を有するであろうか。この調査で得た知見を活用し、本研究をより重層的に進めていきたい。

国内学会参加・研究調査報告

「新しい時代における寺院のあり方研究」 における国内調査報告

新しい時代における寺院のあり方研究 研究員・准教授 藤元 雅文
同 研究補助員 (RA)・博士後期課程真宗学専攻第3学年 松岡 淳爾
同 社会学専攻第1学年 磯部 美紀

特定研究の3年目となる2019年度は、調査研究対象地域である岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区の寺院および地域に関わる聞き取り調査を引き続き行った。殊に特筆すべきことは他出門徒への調査を実施することができたことである。また、2019年3月に行った春日地区における墓地および葬送の調査に関しても継続して取り組むことができた。以下、2019年度上半期において実施した調査報告について、まず他出門徒調査の概要(松岡・藤元)を記し、次に葬送に関する調査概要(磯部)を述べていくこととする。

【他出門徒聞き取り調査】

2019年度上半期において、新たな調査の展開として調査対象地域である揖斐川町春日地区の寺院に関わりのある他出門徒への聞き取り調査を行った。他出門徒とは、過疎地域で生まれ育ち、その後、就学や就職などを機に他地域に移転、居住する門徒のことである。これからの人口減少社会における地域と寺院のあり方を考える際、他出門徒との関わりが持続可能性の上で注目されてきている。

具体的には2019年度上半期では2寺院(以下、A寺・B寺と表記)に協力いただいて、他出門徒への聞き取り調査をおこなった。

A寺の調査においては、他出門徒である女性3名から話を伺うことができた。以下は、聞き取ることができた内容についての概要である。

今回、調査に応じていただいた3名の門徒は、揖斐川町あるいは池田町に在住で、いずれの方の住まいも、春日にある寺院まで自家用車で約20分圏内の場所である。大まかな世帯構成のパターンは、子ども夫婦と孫、または義母と子どもを含めた、3世代家族の4~5人構成である。春日地区には、彼らのご両親ないし夫の実家があり、そのほとんどが空き家であるが、その空き家の状況については、現在は通行止めによって様子を見に行けず、いずれは取り壊す予定であったり、兄弟・家族がいつでもお寺にお参りに来られ

るように定期的に管理していたりと、三者三様であった。また、3名とも当該地域に一族のお墓を持っており、そのお墓の世話については、当番が決まっているわけでもなく地元の方がやってくれている、といった事例の他に、月に1回お墓の花を替えるために家族で訪れている、といった事例も伺えた。

上記に示したような空き家の管理やお墓の世話などの事例は、場合によっては彼ら他出門徒が地元に戻ってくる1つのきっかけとして考えられるが、今回の調査の場合、彼らが当寺院において総代や会計などの寺院運営に関わる役に就いていることも併せて考えられる。実際に、役に就いたことで、多い方は週3日以上も当寺院まで足を運ぶとのことであった。また、以前は年に数回、寺院の行事の時に義母を車で送迎するついでに来ていたが、役に就いて以降、月に1回はお寺に来るようになったという声も聞くことができた。さらに、そういった事情以前に、もともとお寺にはよく来ていたと話をされる方もあり、地元寺院があること自体が帰郷の理由となっている例もあることが知られた。一方、他出先の環境については、近所に当寺院の他出門徒が他にも多く住んでいるとの話があったが、他出門徒どうして集まって会うというよりは、お寺に参った際に顔を合わせるといことがほとんどのようである。ただ、他出先で会うことがあれば、声をかけ合ってお寺に参りにいくこともあるという話もあった。

最後に、当寺院と子・孫世代との今後の関係については、現在のお寺との関係を受け継いでいってほしいと思う一方で、自ら積極的にはたらきかけるのではなく、自分たちの姿を通してゆるやかにでも伝わっていくことを期待する声が聞かれた。何より、他ならぬ彼女ら自身が「人とのつながりを作っていく場」、「地域デビューの場」としての寺院のあり方を実感しており、寺院に対して格別な思いを持って語られる姿は印象的であった。(以上、松岡)

次にB寺における他出門徒への聞き取り調査について報告する。

B寺においては合計9名の他出門徒にお話しを聞くことができた。現在の居住地は揖斐川町6名、瑞穂市1名、池田町1名、大野町1名であり、今回の調査対象者においては中山間地域である旧春日村から離れてはいるが、同じ揖斐川町内に住んでいる方が最も多かった。以下、他出門徒への聞き取りの概要を記す。

まず、春日からの転出先をうかがうと、同じ揖斐川町を除けば、池田町、大野町が多く、ついで、大垣市周辺であり、名古屋やそれ以上の遠方は少ないとのことである。また、世帯構成は、2世代、3世代が多いが、自分たち（他出門徒）にとっては春日地区の寺院は自分たちの寺院であり、拠り所でもあるが、息子世代は寺にほとんど参らないようである。また、墓地や「お内仏」も春日から現住所に移している人が比較的多かった。

また、A寺の場合でもそうであったが、近所に当寺院の他出門徒が多く住んでいる場合でも、他出者同士のつきあいは、昔ながらの交流の範囲に限られており、他出先でお互いが集うという場合はほとんどないようである。

B寺における聞き取りにおいて特に印象に残ったのは、B寺の住職が毎月他出門徒の自宅まで、『同朋新聞』をとどけてくれることが本当にありがたいという複数の声を聞き得たことである。しかし一方で、自然災害が多い昨今、もし寺院の本堂や庫裡に修繕が必要になったとき、その費用をどうしたらよいか心配だという声も、同様に複数から聞かれた。過疎地における寺院の頑張りが他出門徒に伝わっていることを実感するとともに、過疎化が深刻化する中いかんともしがたい現実的な問題に直面し寺院の現状を心配する他出門徒の声にふれる調査となった。

最後になるが、今回のB寺の他出門徒調査において、70代から80代の方が中心であり、自分たちの息子世代が自分たちのように、寺との関係を保ちつづけていけるかについては、課題を感じている声が多かった。しかし一方で、地域の小学校の最後の卒業生だと言っていた40代中ごろの他出門徒の方にも話を聞くことができ、その方にとって春日の寺が自分にとっての寺であり、自分の子どもたちの世代にもできるだけ春日の寺と関わりをもってもらいたいという希望を聞くことができた。(以上、藤元)

【春日地区の葬送墓制に関する聞き取り調査】

本調査は、2018年度下半期に実施した「旧春日村における墓制調査」(『研究所報』No.74にて報告済)の追加調査である。先の調査により、旧春日村内にお

ける墓制は地区ごと(六合・中央・美東)の違いが顕著であるものの、他方で人口減少および当地域の墓制を背景とする同質の困難性を抱えていることが明らかになった。その結果を踏まえた上で本調査は、葬儀を検討項目として追加し、旧春日村の葬送墓制の変遷を確認することを目的に、2寺院(以下、C寺・D寺と表記)の住職への聞き取りを行った。

まず、C寺住職への聞き取り内容の概要を示す。C寺周辺の墓制の特徴として、寺院境内に個人あるいは一族による石塔を持たないということ、また2001年から境内で惣墓の利用が開始されたことが挙げられる。惣墓の建立経緯や維持管理の様子を尋ねたところ、惣墓を利用することでかえって寺院と門徒との関係が疎遠になるケースが聞かれた。葬儀に関しては、自宅での葬儀(以下、自宅葬と表記)におけるC寺の関与の仕方や、葬儀会館での葬儀への変化時期やその背景を中心に尋ねた。自宅葬の場合には、門徒は寺院から「貸出本尊」(阿弥陀仏の絵像)を通夜の前に借りて、還骨動行の後に返却していたという。しかし、イエの代替わりや地縁関係の弛緩を背景に、1~2年前に自宅葬は村から姿を消し、「貸出本尊」の授受もなされなくなったという。

次に、D寺住職への聞き取り内容の概要を示す。D寺の周辺地域は戦前から「墓のある村」である。当地域では、先祖代々の墓を継承する姿や、あるいは自身のために墓を築く様子が見受けられる。近年の傾向として聞かれたのは、「墓じまい」をした後の取骨先として惣墓を用いる人が現れているということ、また葬儀や法事は規模や丁寧さにおいて縮小化が進んでいるということである。自宅葬において用いられていた「ホトケサン」と呼ばれる二軸の掛け軸(阿弥陀仏の絵像と東本願寺法主達如の絵像)も、最近ではほとんど用いられることはないという。これは、C寺の「貸出本尊」と同類のものであり、寺院と門徒をつなぐ上で重要なアイテムであったと考えられている。

以上が、調査結果の概略である。葬送墓制の変遷を伺うことは、門徒と寺院との「つながり」が、いかなる変容を遂げ、今後どう展開していくのかを検討する上で、重要な視座を提示すると考えられる。ここでいう「つながり」とは、死者/先祖という存在をきっかけにして、寺院と門徒との間で形成される関係性のことである。それは、時に「貸出本尊」や「ホトケサン」のような具現化されたモノとしてあり、時に「住職に対する信頼感」や「門徒が寺院を護持しているという感覚」のような心的なものとしてあるといえよう。(以上、磯部)

全国大学史資料協議会西日本部会 2019年度 第1回・第2回研究会に参加して

大谷大学史資料室 嘱託研究員 松岡 智美

大谷大学史資料室は、毎年、全国大学史資料協議会西日本部会に参加している。2019年度前期は、第1回・第2回研究会に参加する機会を得た。

第1回研究会は、6月14日(金)に追手門学院大学にて開かれた。本研究会では、齊藤一誠氏(国際教養学部副学部長・教授、学長補佐、学院志研究室副室長)による「周年事業における史料アーカイブとエクスポジション」と題した講演の後、將軍山会館にて『130年志』刊行記念企画展「追手門130年の先へ」を観覧した。齊藤氏は、さまざまなエクスポジション(史料を“外へ置く”こと)を想定することにより、“周年”を機に行われるアーカイブ活動を、日々の地道な作業の促進と活性化に繋げようという視点から、企業と大学における事例を紹介しつつ、史料の“アクティブ・アーカイブ”について述べられた。そのなかで、大学の事例として、国際基督教大学では、記録を記憶として追体験できるように、HP上で研究活動等の様子を撮った写真や動画を公開している。学外への情報発信と一ヶ所に集約することによる学内活動の収集の両方を可能にする取り組みとして参考になった。その後の研究交流会では、他大学の方と大学史関係資料の収集範囲や保管体制等について意見を交換した。

第2回研究会は、7月9日(火)に関西大学にて開かれた。「三大学連携事業における大学史資料の巡回展示について」と題し、西村航氏(関西大学年史編纂室)より「三大学連携事業について」の概要を話された後、村松玄太氏・阿部裕樹氏(明治大学史資料センター)の「明治大学展について」、北口由望氏(法政大学史センター)の「法政大学展の場合」、西村氏の「関西大学展の開催にあたって」の講演を聞く。その後、西村氏の解説により三大学連携協力協定締結記念特別展示「ボアソナードとその教え子たち」を観覧し、続けて関西大学年史資料展示室企画展「関西大学の学生運動」を観覧した。

この特別展示は、明治政府の法律顧問ボアソナードの教え子たちが法政大学・明治大学・関西大学の三大学を創立したことから、共通のルーツを持つ大学として、2017年に三校による連携協力協定を結んだことを契機として、連携後に初めて実現した事業である。

講演では、各大学の準備・展示・展覧会にあわせたシンポジウムや講演会に関する取り組みについて話された。また、この巡回展示を通じて、他大学が所持している自校の資料や相互に関連する資料の発見等による情報の共有が行われたことや、研究者同士の交流が促進されたこと、三大学の共催展にしたことで資料借用手続が不要となった事例等が紹介された。

これらの研究会に参加して、年史編纂については、学内向けに過去の事柄を中心に書かれる年史が多いなか、地域連携等の活動も包括した学外向けの年史という視点の必要性を感じるとともに、学内や学外に果たす展示の役割を再確認したので、今後の業務に活かしていきたい。



「ボアソナードとその教え子たち」展



関西大学 年史常設展示室

歎異抄ワークショップ開催報告

第6回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究 研究代表者・講師 Michael J. Conway

オハイオ州立大学大学院東アジア言語文学学科

博士後期課程日本語言語学専攻第二年 John A. Bundschuh

国際仏教研究（英米班）研究補助員（RA）・博士後期課程真宗学専攻第二学年 鶴留 正智

2019年6月21日(金)から23日(日)にかけて、本学にて第6回の『歎異抄』翻訳研究ワークショップが開催された。本ワークショップは、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所と龍谷大学世界仏教文化研究センターとの三者による学術交流協定に基づく研究プロジェクトの一環として行われた。本プロジェクトは、江戸期に書かれた『歎異抄』の注釈書の英訳作業を通して、その注釈史を反映する詳細な翻訳書の作成を目的としている。そして、その英訳作業を、キャリアの様々な段階にいる研究者と共同で行うことを通じて、英語圏における次世代の真宗研究者の育成をも目指している。

学生の育成が本プロジェクトの主要な目的の一つということに鑑み、参加された大学院生に報告書の執筆を依頼した。

まず、本学が旅費補助を受けて参加したオハイオ州立大学大学院東アジア言語文学学科に所属する博士後期課程日本語言語学専攻 John Bundschuh 氏の参加報告と所感を以下に掲載する。

2019年6月に大谷大学に開かれた第六回『歎異抄』翻訳研究ワークショップに参加させていただいた。4つのグループに別れて『歎異抄』の江戸期の注釈書を分析し、英訳の作業を行った。その注釈書は円智が1662年に書いた『歎異抄私記』、寿国の1740年の『歎異抄可笑記』、香月院深励が1800年代に講じた『歎異抄講林記』、妙音院深励が1841年の『歎異抄聞記』である。グループを回る参加者もいたが、私は三日間で行われた七つのセッションを通して、コンウェイ先生が担当された深励グループに参加した。

私はワークショップの多数の参加者と違って、専攻は浄土真宗研究または仏教研究ではなく、言語学の研究である。主に漢文の仏典の日本語への読み下しにおける文法を分析している。本ワークショップに参加しようと思ったのは、まず、仏教に精通している先生方

の下で英訳を行いながら自分の仏典の英訳能力を伸ばしたいと思ったこと、また仏典の読み下しの文法を分析するのに、仏教思想をより詳しく理解したいと考えたからである。

余所者である私の初日のワークショップは非常に緊張していたが、大谷大学の先生方、学生方、スタッフの方々に心暖かく歓迎していただいたおかげで、積極的に『歎異抄』の注釈書の英訳作業に参加できた。

英訳の作業は以下の通りである。深励グループはコンウェイ先生が用意してくださった英訳の原稿を一文ずつ調整していった。基本的に、英語を母国語とするものが英語のレトリックや流れを中心にし、日本語を母国語とするものが英訳の正確さを中心に確認した。私にとって今回のワークショップで英訳した『歎異抄講義』の第六章で、最も興味深かったのは深励の「荒涼」という言葉に対する分析である。深励は、古典的な大陸文学から語源を探り、言葉の意味の変遷まで指摘する。例えば、七世紀の中国の漢詩にみる「荒涼」の意味は、「荒れ果てたこと」であり、日本語の「荒涼」の意味は荒れ果てた所で遠慮なく振る舞うことを含めて広がっていると明確に意味的に変化していることを説明している。しかし、この優れた深励の理論を英訳しようとするには言語の壁が非常に高かった。深励は分析の中で、「荒涼」のそれぞれの漢字の意味を分解するので、英訳でもその漢字の意義に触れなければならなかったのである。更に、完成された英訳を通して深励の分析が把握できるように、引用を説明する脚注を一つ一つ入れながら英訳作業を行った。

また英訳の作業の他にも、本ワークショップでは、『歎異抄』に関わる英語の発表が二つあった。一つ目は、大谷大学の卒業生である東真行氏が行なった金子大栄の『歎異抄』解釈に関する発表であった。本ワークショップでは、江戸時代の注釈書が中心となっているので、東氏が明治以降の『歎異抄』の解釈に触れたことを通じて、参加者に、より通時的かつ総合的な理



寿国班の様子

解を与えた。二つ目は大谷大学の大学院生である鶴留正智氏が了祥の方法論を紹介し、分析した発表であった。鶴留氏は、了祥の伝記を踏まえて、1841年から始まった講義からなっている『歎異抄聞記』の分析をした。私が特に興味深く思ったのは、了祥が本居宣長の分析を利用し、二つの回想の助動詞といわれる「キ」と「ケリ」の使い分けで、『歎異抄』が唯円に書かれたと論じたことである。

以上の発表と英訳作業を通して、まだわずかではあるものの『歎異抄』の意義が分かるようになってきた。また、様々な国際的な研究者との協力で、多様な視点を知り、大切な繋がりも得たと思う。この英訳のプロジェクトが完成したら、更に多くの日本語が通じない学者が、その英訳を通して、『歎異抄』や江戸時代の注釈書を知るようになるであろう。このような貴重なワークショップに参加する機会を与えてくださった大谷大学に感謝の意を表する。

次に本プロジェクトが立ち上がった時から、積極的に参加してきた鶴留正智氏の報告を以下に紹介する。

私がこのワークショップに参加するのは、これで6回目になる。これまで単に参加者として参加することが多かったが、今回は久しぶりに研究発表者の一人として参加することになった。

私の発表では「了祥の方法論」について、江戸期の講者である了祥が、国学を中心として発展した国語学を活用することによって『歎異抄』研究を発展させたことや、近代の学者の業績に帰される研究でも、了祥の講義においてすでに見られるものがあることなどを紹介した。加えて、4つある了祥の『歎異抄』の講義録の内、最も体系的にまとまっているものは3回目の講義、『歎異抄耳喰』であることを示した。了祥の『歎異抄』講義を英訳する場合に何を底本とするか議論に揺れがあったが、これからは『歎異抄耳喰』を中心として英訳するようになるだろう。



鶴留氏の発表

質疑では、権威である深励を批判した了祥の受容についてや、深励の弟子の傾向、また江戸期における日本語の時制の研究の動向などについて質問があった。了祥の受容や深励の弟子についてはある程度答えられたと思うが、日本語の時制の研究史についてはこの時点では疎く、満足に答えられなかった。

今回のワークショップを受けて、またワークショップが終わって学びを新たにしていく中で、私たちの課題として浮き彫りになっていくことは、日本語そのものの研究の重要性である。古文が持っていた豊かなテンズ、表現を現代日本語は喪失している。現代日本語から英語に訳す際も、あるいは英語から日本語もそうであるが、同様に、その同音多義や、時制、態などの問題が還元され、失われる。親鸞を読むことも、親鸞研究を読むことも、日本語を読み、解釈することである。時に雄弁に物語る文法に対する関心を失ってしまったら、解釈学としての真宗学にレクイエムを奏でることになるだろう。これは翻訳不可能性に対する絶望ではない。むしろ、その独特の文体、文法を解明することが、思想を翻訳するための大いなる礎であることを意味する。

この発表と質疑は、その課題をより明確にするものになった。

以上、二名の大学院生の参加報告から読み取れるように、本プロジェクトは、新しい参加者を得ながら、順調に進んでいる。

しかし、翻訳作業は、当初の予定より多くの時間を要しており、10回のワークショップの実施で『歎異抄』の全文に対する注釈を翻訳することができないことが明確になってきている。そこで、今回のワークショップで、カリフォルニア大学バークレー校の Mark Blum 教授と龍谷大学の嵩満也教授と協議し、今後の方針と計画の変更について意見を出し合った。3月に開催される第7回ワークショップにて今後の方向性について結論に至るための重要な議論となった。

公開講演会・公開研究会

ジョナサン・シルク氏による公開講演会

国際仏教研究（英米班）研究員・准教授 新田 智通

2019年5月23日(木)の14時40分より、2019年度の国際仏教研究英米班の第2回公開講演会として、オランダのライデン大学地域研究研究所（Leiden University Institute for Area Studies）教授のジョナサン・シルク氏をお招きし、“Editing without an Ur-text: Buddhist Sūtras, Rabbinic Text Criticism, and the Open Philology Digital Humanities Project”（原典を欠いた編集——仏教経典、ラビ文献の本文批評と、オープン・フィロロジーというデジタル・ヒューマニティーズのプロジェクト）という題目で講演会を開催した。会場には、学内外の研究者や本学の大学院生など、約30人の聴衆が訪れた。また、講演会は基本的に英語で行われたが、時折シルク氏自らが流暢な日本語で内容について補足するかたちで進められた。

近年のコンピューター技術の著しい発展は、仏教学の方法論にも多大な影響・変化をもたらしているが、題目の示すとおり、今回の講演はそうした事柄に関する内容であった。多くの仏教文献のみならず、ホメロスの叙事詩やユダヤ教のラビ文献などは、いずれも「原典」と呼べるテキストがこんにちに伝わっていないのであるが、そのような文献を、その元来の意図のとおり理解して校訂するという作業は、様々な困難を伴うものである。シルク氏はそうした問題に取り組むべく、2018年に欧州研究会議（European Research Council）の助成を受けて、ライデン大学において「オープン・フィロロジー」というプロジェクトを立ち上げた。

このプロジェクトは、仏教文献以外の分野でこれまで用いられてきたデジタル・ヒューマニティーズの成果を土台として批判的に取り入れている。そこで参照され生かされている他分野での成果としては、例えば、ラビ文献のテキスト校訂者として名高いカイク・ミルコウスキーの提唱する方法論や、旧約聖書の校訂を通して蓄積されてきた様々な知見などが挙げられる。しかし、仏教文献の校訂、とりわけ「原典の再構築」を目指すには、他分野で培われたそれらの方法論をただ機械的に移植すれば良いというわけではない。特に大乘仏典に関しては、サンスクリット語のテキストが不完全である場合が少なくない。また当然、漢訳やチベット語訳も参照しなくてはならないが、それらが訳された時代や文化的背景も多様である。これらの困難を乗り越えて、将来的には、コンピューター技術を用いた普遍的なテキスト校訂の手法を仏教文献学の分野において確立することが目指されているのだが、その最初の試みとしてこのプロジェクトが現在取り組んでいるのは、『大宝積経』という大乘経典の原典の再構築である。

講演の後には活発な質疑応答がなされた。また講演会終了後には、シルク氏ともゆかりのある東方仏教徒協会（EBS）の事務室に場所を移し、茶話会が催された。こちらにも10名ほどの参加者があり、欧米の仏教学の現状や過去の思い出など、様々なことについて語り合いながら、18時過ぎまで有意義な時を過ごすことができた。



ジョナサン・シルク教授



講演会の様子

ジョリアン・トマス氏による公開講演会

国際仏教研究 (英米班) 研究補助員 (RA)・博士後期課程真宗学専攻第三学年 常塚 勇哲

国際仏教研究班では、二回、もしくは三回、外部より講師を招き公開講演会を行っている。本会は、2019年4月23日(水)16時半より約90分で、響流館3階マルチメディア演習室で行われた、2019年度最初の公開講演会である。講演者として、ペンシルバニア大学の助教授であるジョリアン・トマス氏をお招きし、「Japanese Buddhists and Religious Freedom」(日本人仏教者と信教の自由)という題の下、英語で御講演をいただいた。

トマス氏は、「日米における宗教・道徳・公教育」という枠組みで研究を行っている。氏の著書には、『Drawing on Tradition: Manga, Anime, and Religion in Contemporary Japan (伝統を踏まえる：現代日本の漫画・アニメと宗教)』University of Hawaii Press、(2012年9月)、『Faking Liberties: Religious Freedom in American-Occupied Japan (自由の偽装：アメリカ占領下日本における信教の自由)』University of Chicago Press、(2019年3月)などがあり、様々なテーマと宗教の関連を明らかにすべく研究活動をされている。本発表は、2019年3月に発刊された『Faking Liberties』の内容を中心としており、トマス氏の最新の研究成果を披露していただく場となった。また講演には学内のみならず、学外からも数多くの参加があり、氏の研究に対する高い関心が窺えた。以下、講演の概略である。

まずトマス氏は、第二次世界大戦後(1945-1952)の日本における「信教の自由」の状況を確認した。氏は日本で「信教の自由」を論じる際には、まず神道が国家神道として、国家と非常に密接な関係にあることを確かめる必要性を指摘する。トマス氏は、その理由として、戦時中の日本では国家神道が戦争推進に大きな役割を果たしていたこと、またそれがアメリカにおいて日本が政治と宗教を分離せずにいる状況として注目を集めており、戦後のGHQの施策や議論に大きな影響を与えたことを紹介する。基本的にアメリカでは、日本に「信教の自由」がないと受け止められていたが、トマス氏は明治まで遡れば、「信教の自由」に関する議論は常に行われていた事も合わせて示した。

次に、明治の日本において「信教の自由」が議論される中で、仏教がいかなる扱いを受け、またいかなる取り組みをしてきたかを述べた。明治政府下では、

「廃仏毀釈」に代表される仏教迫害が行われたが、それは仏教の伝統に代わって、新たにキリスト教の伝統が大きく流入することに繋がった。氏は、仏教者が、後に「国家神道」として大きな力を発揮する神道よりも、むしろキリスト教に大きな脅威に感じていたことを指摘する。仏教者は、そのような状況を受けて、仏教こそ本当の宗教と位置付けるため、国家より「公認教」として保護を受けることを目指す動きがあったことも示した。

トマス氏は、そこから更に具体的に「信教の自由」について、仏教者がいかなる態度を示したのかを、近角常観(1870-1941)、安藤正純(1876-1955)、牧口常三郎(1871-1944)などの動向を紹介した。近角は、政府による平等主義的な視点からの画一的な宗教の扱いを非難し、一方で安藤は、政府による法的な保護を重要視した。牧口は、根本的に憲法は宗教的真理に劣るという立場を取り、政府による「信教の自由」の保証そのものに重要性を見出さなかった。このように同じ仏教者であっても、「信教の自由」に対する主張が大きく異なり、またそれぞれの議論の焦点も異なっていた。

トマス氏は、このような日本における「信教の自由」の経過を踏まえて、「信教の自由」は単純にあるか、ないかというようなことで議論されるべきではないと指摘する。氏は、誰が「宗教」や「自由」を規定しているのか、またそれが何を基準とし、どのような要素で形作られているのかを明確にする必要性を述べ



質疑応答の様子

る。トマス氏は、このような手順を踏むことは「信教の自由」の議論において、日本で「宗教」がいかなるものと認識されていたかを鮮明にすると指摘され、そ

の視点をを用いるべきことを提言された。

以上のように、トマス氏より講演いただき、活発な質疑応答が行われ、盛況の内に講演会は終了した。

ジェフ・シュローダー氏による公開講演会

国際仏教研究（英米班）研究補助員（RA）・博士後期課程真宗学専攻第二学年 鶴留 正智

今年3回目の国際仏教研究班の公開講演会は、2019年9月27日（金）の18時からマルチメディア演習室で行われた。講師はオレゴン大学助教授のJeff Schroeder先生で、講題は『「死ぬときはみな仏になる」：曾我量深と戦時下の大谷派の教団』である。講題の「死ぬときはみな仏になる」とは、太平洋戦争開戦直前の大谷派の会議において曾我量深より発せられたことばであるが、講演のテーマも大谷派の戦時教学における近代教学の位置を捉え直すものである。近年同様のテーマが話題となっていることもあって、学外からの来場者も多く、合わせて30人以上が来聴に訪れた。講演の言語が日本語だったことも多くの来場者の理解の助けとなったことだろう。講演の時間は1時間ほどで、残りの30分は質疑に割かれたが、質疑も盛況で、さまざまな意見の交換が行われた。

冒頭で少し触れたが、今回の講演では、金子大栄、曾我量深に代表される近代教学が一度は異安心事件によって挫折しかけたが、彼らの教学が国家主義と近接していたために、国と大谷派の戦時体制によって復権したことが論じられた。

近代教学の端緒は大谷大学の初代学長、清沢満之と彼を中心とする宗門改革運動に求められるが、その運動は1950年代、60年代に真宗大谷派の権力に立った訓覇信雄の同朋会運動によって頂点を迎える。これは真宗大谷派における「革命」であり、「パラダイムシフト」であるが、清沢亡き後、同朋会運動の精神的支柱として機能したのは清沢と共に『精神界』の発行に携わった暁鳥、金子、曾我といった面々である。このうち、大谷大学で教育職に就いていたのは金子と曾我であるが、彼らの「近代的」宗学理解は反感を呼び、まず金子が異安心に、次いで曾我は異安心にこそならなかったが、大谷大学の職を追われた。

その転機となったのが、1940年3月施行の「宗教団体法案」である。この法案によって国家の戦時体制が宗教にも及び、天皇絶対主義に背く宗教団体は解散させられるという危機感が芽生え、宗派は「真宗教学懇談会」を招集する。この懇談会にはさまざまな学者や布教師が招集されたが、その中には異安心とされて

きた金子や曾我、暁鳥も含まれた。それと同時に保守派、伝統宗学の学者も招集された。曾我は金子や暁鳥に同調し、あるいは伝統宗学に反論するかたちで議論を展開したが、その展開の仕方は、超国家、あるいは超宗教的という点に特徴がある。たとえば「死ぬときはみな仏になるのだ。（中略）弥陀の本願と天皇の本願は一致している」、「仏法の法と日本の御国とは根本的に一致する」といった言説である。これらの言説によって、時代に相応した教学を説いたと評価された曾我は、大谷大学でふたたび教授職を得て、近代教学へのパラダイムシフトに参画していくのである。

会議自体は戦時体制下で行われたものであったが、曾我のこのような言説はこの時限りのものではなく、すでに30年代から雑誌『開神』において述べられていた。懇談会を主催する側も、当然、このような主張がなされることを予感していたであろう。その意味で、大谷派の戦時教学は、戦時に一体となって迎合した問題ではなく、むしろ時代の課題に答えきれない伝統宗学に対抗するオルタナティブとして曾我のような近代教学の思想が見出された問題であると言える。戦時体制によって、近代教学の地位が押し上げられたのである。

本講演は、そのような事実に対して何かの評価、批判や支持を加えることを企図したものではなかった。



シュローダー先生の講演

そうではなく、近代学術が大谷派の「正統的教義」になる過程を追うことによって、私たちに「正統的教義」が流動的であること、しかもそれが時代の政治や文化に順応することによって生み出されることを示し

た。それは時代によってゆがめられる問題でもあり同時に、伝統の束縛からの解放でもあり得る。サンガは仏と法を保存するだけではなく、同時にそれを生み出してきているのである。

中国社会科学院古代史研究所からの 研究者招聘と公開研究会の開催

国際仏教研究（東アジア班）研究員・教授 松浦 典弘

真宗総合研究所と中国社会科学院古代史研究所（旧：中国社会科学院歴史研究所）が学術交流協定を結んだのは2010年のことであり、今年は交流が始まって早や10年目となる。これまで相互に研究者を派遣し、研究会の開催を行い、相互の研究の進展に寄与してきた。

今回は5月21日(火)～24日(金)の日程で、古代史研究所の卜憲群所長・王啓發研究員・戴衛紅研究員・博明妹総合処副処長の4名を招聘し、学術交流活動を行った。

公開研究会は、22日(水)14時から17時30分まで、響流館3階のマルチメディア演習室を会場に行われ、4名の先生方に御発表いただいた。

博明妹総合処副処長は「歴史研究所近5年来的の対外学術交流（歴史研究所の最近5年間の対外学術交流）」と題して発表された。本年1月に中国社会科学院古代史研究所と改称したばかりの中国社会科学院歴史研究所は、中国社会科学院の前身である中国科学院時代から数えると50年以上の伝統を持つ研究機関である。博先生には交流開始の時点からお話をさせていただいているが、本学を含めた世界各地の研究機関と古代史研究所との交流の現状について、その概要をお話ししていただいた。

戴衛紅研究員は「東亜簡牘文化的の傳播：以韓国出土“椶”字簡为中心（東アジアの簡牘文化的の傳播：韓国出土“椶”字簡を中心に）」と題して発表された。新たに韓国で出土した新羅や百済の時期の「椶」字を有する簡において、「椶」が倉庫の意味で用いられていることに注目する。中国の文献では見られない用法であるが、「椶」は倉庫の意味を持つ「京」と語源を同じくし、4世紀末に朝鮮半島に逃亡してきた中原漢人の壁画墓中に食物を蓄えておく「京屋」が見られ、5世紀初めの高句麗壁画墓中に倉庫の意味の「椶」が出現し、そうした意味の「椶」の用法が日本にまで流布したとし、韓国の木簡が東アジアの簡牘文化的の傳播の

中で中国と日本を仲介する重要な役割を持つとする。

王啓發研究員は「先秦非儒家学派的先王觀概説（先秦の非儒家学派的先王觀の概説）」と題して発表された。先秦時代の百家争鳴の思想状況のもと、儒家以外の学派は、上古の先王の系譜や道統の記述に関して、儒家と大凡同じであったり、さらに古くさかのぼったりしていたものが、異なる歴史観やそれぞれの道統説が形成されるにつれて、その思想の主張に呼応して変化していった。王先生は、墨家・法家・道家・名家及び管子学派のそれぞれについて、儒家と比較しながら、それぞれの先王の系譜がどのように変質を遂げていったのかについて論じられた。

卜憲群所長は「先秦秦漢の民間輿論与国家治理（先秦秦漢の民間輿論与国家統治）」と題して発表された。民間輿論とは民間の基層社会に流传している輿論のことで、形式は多様であり、内容もたいへん広範にわたるが、主に政治上の人物や政治の善悪を評価するような民間輿論を取り上げられた。民間輿論与国家の政治秩序の関係は先秦時代に始まり、秦の統一後は一時停滞するが、前漢には発展へと転じ、後漢にはたいへん発展するが、後漢末から魏にかけて変質を遂げ、九品中世法の制定はその流れのたどり着いたところであると論じられた。

公開研究会に先立ち、先生方は博綜館5階の第3会議室で木越康学長を表敬訪問され、今後の学術交流の在り方も含めて意見交換がなされた。また、同日夕刻には木越学長主催の歓迎懇談会が開かれ、宮崎健司学監・副学長、浦山あゆみ研究・国際交流担当副学長らも出席し、和やかな雰囲気の中で歓談し、親睦を深めた。交流開始から10年目にして初めて古代史研究所の所長を本学にお迎えすることができたことで、今後、更に学術交流が進展し、双方の研究の発展に裨益することが期待される。

東京分室 PD 研究員個人研究成果概要

パーリ語の時制に関する研究

元東京分室 PD 研究員 稲葉 維摩

本研究は、パーリ語の時制を初めとする動詞の諸問題についての研究である。パーリ語は中期インド・アーリヤ諸語という分類に属する言語で、上座部という部派仏教の文献を伝える。中期インド・アーリヤ諸語は、サンスクリット語（ヴェーダ語と古典サンスクリット語の総称で、古期インド・アーリヤ語とも呼ばれる）と比べて、言語変化がある程度進んだ諸言語のことである。パーリ語に関する研究は、古い文法を保持するサンスクリット語を基準にした比較研究が中心的といえる。サンスクリット語とパーリ語を比較することで、もとの形式は何だったのか、どんな変化が起こったのかといったことがわかる。そのことから、パーリ語の全体像や位置づけを理解していくのである。

しかし、このようなパーリ語研究は、サンスクリット語というフィルタを通してパーリ語を見てしまうという危険性をはらんでもいる。パーリ語はサンスクリット語とは異なる文法を持っている。文法の個々の要素がどのような役割を担い、どんな体系を作っているかということは言語研究の基本である。例えば、サンスクリット語の過去時制の定動詞には、「未完了過去」、「アオリスト」、「完了」という3つの形式がある。それに対して、パーリ語の過去時制の定動詞は「過去形」という形式だけである。この過去形は、歴史的に見るとサンスクリット語のアオリストを中心とした活用になっている。このことから、パーリ語の過去形はサンスクリット語のアオリストがもともとなっていることがわかる。しかし結局は、サンスクリット語にあった3つの区別がパーリ語ではなくなっている。それでは、パーリ語は物事をどのように表現し分けるのだろうか。パーリ語そのものを調べていかなければ、このことはわからない。しかし、パーリ語を初めとする中期インド・アーリヤ諸語においてはこのような視点に立った、言語そのものに対する研究はあまり進んでいないというのが現状といえる。

以上の問題に対して、本研究は動詞の時制やアスペクトなどのことを扱うテンス・アスペクト研究の視点を持って、パーリ語の動詞について研究した。パーリ語の現在時制と過去時制は、基本的に次のような仕組

みを持っている。

パーリ語の現在時制の定動詞である現在形は、意味が不定の無標の形式である。対して、過去時制の定動詞である過去形は過去を表す有標の形式である。過去形は特定の副詞との共起や文脈によって、過去の出来事が何らかの点で現在にも関連していることを意味する anterior（動作パーフェクトとも言われる、いわゆる現在完了のこと）を表すことができる。また、現在形は、過去を指す副詞との共起や文脈によっては過去のことも表すのだが、その場合には過去形との棲み分けがあり、現在形は過去の習慣・継続・反復を表すようになる。物語の語りでは、過去形は物語の中心的な筋を進める「前景」を表し、現在形は中心的な筋以外の出来事や解説、要約などの「背景」を表す。

同時に、今後の研究の展開を見据えて、本研究ではパーリ語で新しく生まれたと考えられる自動詞・他動詞のペアについて調べた。この動詞は、パーリ語での使われ方を見れば、自動詞・他動詞のペアになっていることがわかる。しかし、先行研究においてはペアと見なされていない場合や、かえって複雑に解釈されている場合がある。問題の語の由来をサンスクリット語に求めることで、ペアであることが見えにくくなってしまったのではないかと考えられる。

サンスクリット語との関係を求める一方で、パーリ語の言語事実が置き去りにされてしまうのは正しくない。また、本研究で調べたことの中には、先行研究に指摘されていることやおおよそ知られていることも含まれている。例えば、物語の語りにおける現在時制と過去時制の違いは、これまでの仏典の翻訳を見れば、おおよそその通りに訳されている。しかし、そのことによって、パーリ語の仕組みがすでに明らかであるということにはならない。このような問題意識を持って、本研究では、パーリ語そのものが持つ仕組みを記述していくことを目指した。

「化身土巻」読解を中心とした 親鸞思想の総合的研究

元東京分室 PD 研究員 藤原 智

本研究は、親鸞の著書『教行信証』の「化身土巻」、特にその後半の「末巻」と呼ばれる箇所を読解を中心としつつ、さらにその親鸞思想が近現代に至るまでどのように受容し解釈されてきたまでを含めて明らかにすることが目的であった。それにあたり大きく三つの課題を立てた。(1) これまでの「化身土巻」研究のより精確な読解。(2) 「化身土巻」からの『教行信証』全体の見直し。(3) 清沢満之や曾我量深に代表される、いわゆる近代真宗教学の再検討。そこで、以下この三点に沿って成果を報告する。

(1) これまでの「化身土巻」研究のより精確な読解。「化身土巻」読解における従来からの一番の懸念は、大部の『弁正論』引用文が一般に流布している『弁正論』と多くの相違点を持つことであった。このテキスト上の難点が、研究の進展をとどめていたと言ってもよい。そこで特に中世にどのような『弁正論』が流布し、かつ親鸞は閲覧していたのかについての研究を行った。その成果が「日本古写経『弁正論』と親鸞『教行信証』」(『日本古写経研究所研究紀要』第2号、2017年)であり、そこで親鸞が閲覧したのは基本的には日本古写経系統でありつつも、そこに宋版一切経の影響も少し見られることを指摘した。次いで、親鸞の引用箇所が散逸しているため、先論文では用いなかった法隆寺本『弁正論』に関し、全文公開されている巻第三について検討し、古写本『弁正論』の流传状況をより広く確かめた。これは「日本古写経『弁正論』巻第三の諸本比較-築島裕氏の検討を受けて-」と題して、『印度學佛教學研究』第66巻第1号(2017年)に論文掲載された。また親鸞の特殊な『弁正論』引用と、誤字脱字も含めて全く同様の引用を浄土宗の聖岡が行っていることに注目した。その関係については「親鸞と聖岡の『弁正論』引用について-親鸞の引用は親鸞による抄出か-」との題で、『東アジア仏教研究』第16号(2018年)に論文掲載された。その他、この点に関連するものとして「高野山大学図書館所蔵『弁正論』について」(『印度學佛教學研究』第67巻第1号、2018年)を発表している。

(2) 「化身土巻」からの『教行信証』全体の見直し。テキスト研究を中心とした(1)に対し、(2)は親鸞思想の問い直しを中心とする。その初めに「化身土巻」の主題ともいえる「化身」概念について、従来の

通説を問い直した。この点は既に加来雄之の指摘があるが、存覚に依拠した加来に対し、法然との対比からこの「化身」概念を考察した。その成果は「『西方指南抄』から見る親鸞の仏身観-『観経』真身観を中心に-」と題し、『印度學佛教學研究』第65巻第1号(2016年)に論文掲載された。次いで、親鸞による「化身土巻」での『弁正論』引用の意義について、その引用中に阿闍世王に関する記述があることに注目し、そこから「信巻」での『涅槃経』の阿闍世王の救済譚の引用との関連性を考察した。その成果は「親鸞における阿闍世という課題-『教行信証』「化身土巻」の『弁正論』引用から-」と題し、『真宗研究』第63号(2019年)に論文掲載された。また、「化身土巻」の引用が『論語』で終わる意義について、親鸞による一連の引用文の展開を通して考察した。その成果は「親鸞『教行信証』「化身土巻」における『論語』引用について-法琳・遵式の引用を通して」と題し、『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第36号(2019年)に論文掲載された。

(3) 清沢満之や曾我量深に代表される、いわゆる近代真宗教学の再検討。大谷大学の初代学長であり、近代真宗教学に大きな影響を与えた清沢満之について、清沢が大学経営を委託された明治32年7月頃(頃)の思想課題として巢鴨監獄教誨師事件との関わりを研究した。その要点は「清沢満之の明治31年の東上と巢鴨監獄教誨師事件」と題して『宗教研究』第90巻別冊(2017年)に掲載された。さらに、その明治32年末に井上哲次郎が発表した倫理的宗教論に対し、それへの批判的立場として現わされてきたのが清沢の精神主義であったことを考察した。この点は『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第37号(2020年発行予定)に論文を投稿中である。また清沢を基点とした大谷派における学問論の確かめについて考察し、「真宗大谷派における宗学の問い直し-大谷大学の真宗学の名称をめぐって」と題して、智山勸学会編『日本仏教を問う-宗学のこれから』(春秋社、2018年)に論文掲載された。近代以降の真宗教学の大問題が往生をいかに理解するかであるが、その点に関して非常に大きな影響をもつ曾我量深の議論について、還相回向に関する鈴木大拙の影響を含めて考察した。その成果は「曾我量深の「往生と成仏」論について-その影響としての鈴木大拙-」と題して『親鸞教学』第110号(2019年)に論文掲載された。

中世キリスト教神秘思想における「関係」概念の受容とその存在論における展開

元東京分室 PD 研究員 松澤 裕樹

本研究の背景には、マイスター・エックハルト (ca. 1260-1328) が当時のスコラ哲学の主流を占めていた実体概念をその中核とする実体的存在論を克服し、アリストテレス哲学においては偶有に過ぎない関係概念をその中核に据える関係的存在論を新たに展開したという筆者の研究がある (Hiroki Matsuzawa, *Die Relationsontologie bei Meister Eckhart*, Ferdinand Schöningh, 2017)。

本研究の目的は、上記の研究において見出されたエックハルトの関係的存在論がいかなる哲学史的枠組の中で理解されるべきかという問いに答えるべく、その基礎研究として彼の存在論が十四世紀の神学者／哲学者においていかに受容されたかという問題を明らかにすることにある。

第一論文 (松澤裕樹「クヴェートリンブルクのヨルダンのラテン語説教におけるエックハルト批判」、『中世思想研究』第 61 号、2019 年、82-95 頁) では、教皇ヨハネス二十二世によって発布された勅書『主の耕地にて』において断罪されたエックハルトの神秘思想が、その後いかに批判／受容されたかという問題に焦点を当て、当時高名な説教師として民衆に絶大な影響を及ぼしたアウグスティノ会士クヴェートリンブルクのヨルダンがエックハルトの思想をいかに批判／受容したかについて詳細に分析した。その結果、ヨルダンは、自身のラテン語説教において、エックハルトの『ヨハネ福音書註解』における思想を肯定的に受容しながらも、『弁明書』に記されたエックハルトの異端的言説に関しては厳しい批判を加えており、この批判は内容的に以下の四つに分類できることが判明した。第一の批判は、「魂における神の子の誕生」教説に関するものであり、三位一体における神の子の誕生と魂における神の子の誕生の同一視が批判の対象となった。第二の批判は、像理解に関するものであり、神の像である魂が神を認識することで神と完全に一になれるというエックハルトの認識論が糾弾された。第三の批判は、受肉論に関するものであり、人間一人ひとりの人格の内に神の子が誕生しなければキリストの受肉は無意味であるとする受肉理解が批判された。第四の批判は、神と魂の合一に関するものであり、神との合一によって魂が実体的に変化するとみなす合一理解が

批判された。ヨルダンのラテン語説教は、ドイツ語やオランダ語に翻訳されて多くの民衆に伝播したことがわかっており、その後の民衆霊性におけるエックハルトの思想的影響を知るためにも、非常に重要な資料であると言える。

第二論文 (松澤裕樹「14 世紀前半のドミニコ会関連ドイツ語著作『能動知性と可能知性について』における知性論」、『真宗総合研究所研究紀要』第 37 号、2020 年、掲載予定) では、グリュンディヒのエックハルトがその著者とされるドイツ語著作『能動知性と可能知性について』における知性論を分析し、本書の著者がフライベルクのディートリヒ (ca. 1250-1310 以後) とマイスター・エックハルトにおける神認識に関する思想をいかに受容したのかという点を明らかにした。その結果、本書における能動知性論は、ディートリヒの能動知性論を完全に継承しながらも、ディートリヒが用いた実体概念を否定し、その代わりに存在概念を用いて論が展開されており、この概念はマイスター・エックハルトの「魂における神の子の誕生」教説において用いられる関係的存在論と関わる存在概念に由来するものであることが判明した。

また、上記の研究に付随して、エックハルトが展開した関係的存在論を異なる文脈から論じることにより、関係的存在論が彼の思想の中核をなすものであることを証明しようと試みた。第三論文 (松澤裕樹「エックハルトにおける人間神化と関係的存在論」、田島照久・阿部善彦編『テオシス 東方・西方教会における人間神化思想の伝統』教友社、2018 年、330-354 頁) では、エックハルトの関係的存在論がキリスト教の伝統である人間神化論の枠組の中に位置づけられることを明らかにした。第四論文 (松澤裕樹「エックハルトの所有論-所有からの自由、そして自由な所有へ-」、『フィロソフィア』105 号、2018 年、143-165 頁) では、彼の所有論が関係的存在論に基づいて展開されていることを明らかにした。第五論文 (松澤裕樹「エックハルトの三位一体論における存在論」、『パトリステイカー教父研究-』第 22 号、2019 年、41-60 頁) では、エックハルトの三位一体論において関係的存在論が中心的役割を果たしていることを明らかにした。第六論文 (松澤裕樹「Significance of Watsuji Tetsurō's Ethics in a Global Society」、權寧佑編『中心無き世界における中心としての東洋と西洋』、オークラ情報サービス、2019 年、179-190 頁) では、上記の研究をさらに比較思想的観点から発展させ、和辻哲郎の倫理学における関係的存在論と現代社会におけるその意義について論じた。

真宗総合研究所彙報 2019. 4. 1 ~ 2019. 9. 30

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2019年5月10日(金)12:20~12:45(響流館4階会議室)

1. 特別研究員の人事について
2. 2019年度研究組織について
3. 私立大学研究ブランディング事業について

◇2019年7月29日(月)15:00~16:00(博綜館第4会議室)

1. 紀要投稿ガイドラインの改正について
2. 2019年度「一般研究(柴田班)」研究計画の変更について
3. 2019年度研究組織について
4. 中国社会科学院との協定の更新について
5. 報告事項

◎研究ブランディング事業ワーキングチーム会議

◇2019年4月24日(水)12:20~13:00(博綜館第5会議室)

1. 2018年度進捗状況について
2. 2019年度の私立大学研究ブランディング事業について
3. その他

新しい時代における寺院のあり方研究

【寺院・門徒調査】

日 時 2019年8月6日(火)
場 所 光永寺(岐阜県揖斐郡揖斐川町春日小宮神)
内 容 光永寺・他出門徒聞き取り調査
参加者 東館紹見・徳田剛・藤枝真・松岡淳爾

日 時 2019年8月23日(金) 24日(土) 25日(日)
場 所 発心寺(岐阜県揖斐郡揖斐川町春日美東)
内 容 発心寺・近在門徒および他出門徒聞き取り調査
参加者 山下憲昭・藤元雅文

日 時 2019年8月30日(金)
場 所 遍光寺(岐阜県揖斐郡揖斐川町春日六合)
内 容 春日六合地区周辺の葬送儀礼および墓地に関する聞き取り調査
参加者 本林靖久・磯部美紀

日 時 2019年9月2日(月)
場 所 発心寺(岐阜県揖斐郡揖斐川町春日美東)
内 容 春日美東地区周辺の葬送儀礼および墓地に

関する聞き取り調査

参加者 本林靖久・磯部美紀

【ミーティング】

◇第1回

日 時 2019年4月9日(火)14:40-16:10
出席者 木越康 東館紹見 山下憲昭 徳田剛
藤枝真 藤元雅文 松岡淳爾 磯部美紀
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容 2019年度における調査、研究等の概要について

◇第2回

日 時 2019年4月23日(火)14:40-16:10
出席者 木越康 東館紹見 山下憲昭 徳田剛
藤枝真 藤元雅文 松岡淳爾 磯部美紀
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容 2019年10月におけるシンポジウムについての検討等

◇第3回

日 時 2019年5月21日(火)14:40-16:10
出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真
藤元雅文 松岡淳爾 磯部美紀
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容 2019年度『紀要』論文および調査実施についての検討等

◇第4回

日 時 2019年6月11日(火)14:40-16:10
出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真
藤元雅文 松岡淳爾 磯部美紀
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容 「宗教と社会」学会における発表(徳田剛)についての報告検討等

◇第5回

日 時 2019年7月2日(火)14:40-16:10
出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真
藤元雅文 松岡淳爾 磯部美紀
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容 8月実施の門徒調査におけるスケジュールの検討等

◇第6回

日時 2019年8月1日(木)13:00-14:30
出席者 木越康 東館紹見 山下憲昭 徳田剛
藤枝真 藤元雅文 松岡淳爾 磯部美紀
場所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内容 科研申請に関する検討等

◇第7回

日時 2019年8月29日(木)15:30-17:00
出席者 木越康 東館紹見 山下憲昭 徳田剛
藤枝真 藤元雅文 松岡淳爾 磯部美紀
場所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内容 10月開催のシンポジウムおよび科研申請
に関する確認、検討等

◇第8回

日時 2019年9月24日(火)14:20-16:10
出席者 木越康 東館紹見 山下憲昭 徳田剛
藤枝真 藤元雅文 松岡淳爾 磯部美紀
場所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内容 門徒調査(8月)報告、シンポジウムの確
認、科研申請の検討等

【揖斐川町春日地区に関する調査報告会】

日時 2019年5月10日(金)17:00-18:30
場所 真宗総合研究所ミーティングルーム
報告者 本林靖久(本学非常勤講師・嘱託研究員)
磯部美紀(本学大学院博士後期課程1年・
研究補助員)
内容 旧春日村における寺院・墓地・葬儀調査報
告

国際仏教研究

〈英米班〉

【海外出張】

◇国際真宗学会パネル発表

日程：2019年5月24日(金)～5月26日(日)
於：台湾法鼓文理学院
出張者：Michael J. Conway、加来雄之、井上尚実

【会議】

◇2019年4月18日(木)5限『歎異抄』注釈書翻訳研究
ワークショップ打ち合わせ①

於：真宗総合研究所内 ミーティングルーム(響流
館4階)
参加者：Michael J. Conway、井上尚実、新田智通、
常塚勇哲、鶴留正智

◇2019年6月6日(木)5限『歎異抄』注釈書翻訳研究
ワークショップ打ち合わせ②

於：真宗総合研究所内 ミーティングルーム(響流
館4階)
参加者：Michael J. Conway、井上尚実、新田智通、
常塚勇哲、鶴留正智

◇2019年6月20日(木)5限『歎異抄』注釈書翻訳研究
ワークショップ打ち合わせ③

於：真宗総合研究所内 ミーティングルーム(響流
館4階)
参加者：Michael J. Conway、井上尚実、新田智通、
常塚勇哲、鶴留正智

◇2019年7月25日(木)5限 後期研究活動打ち合わせ
於：真宗総合研究所内 ミーティングルーム(響流
館4階)

参加者：Michael J. Conway、井上尚実、Dash
Shobha Rani、新田智通、常塚勇哲、鶴留
正智

【公開講演会】

◇日時：2019年4月23日(火)5限

於：マルチメディア演習室(響流館3階)
題目：「Japanese Buddhists and Religious Freedom
(日本人仏教者と信教の自由)」
講師：ジョリアン・トマス氏(ペンシルバニア大学
助教授)

◇日時：2019年5月23日(木)5限

於：マルチメディア演習室(響流館3階)
題目：“Editing without an Ur-text: Buddhist
Sūtras, Rabbinic Text Criticism, and the
Open Philology Digital Humanities Project”
(原典を欠いた編集——仏教経典、ラビ文献
の本文批評と、開かれた文献学的デジタル・
ヒューマニティーズのプロジェクト)
講師：ジョナサン・シルク氏(ライデン大学教授)

◇日時：2019年9月27日(金)18:00～19:30

於：響流館3階 マルチメディア演習室
講題：「死ぬときはみな仏になる」：曾我量深と戦時
下の大谷派の教団
講師：ジェフ・シュローダー氏(オレゴン大学准教
授)

【ワークショップ】

- ◇日時：2019年6月21日(金)～23日(日)
 於：響流館3階マルチメディア演習室、演習室1-4・慶聞館4階 K 401-K 404、マルチスペース
 内容：『歎異抄』翻訳研究ワークショップ

〈東アジア班〉

- ◇中国社会科学院古代史研究所との共同研究
 ①2019年5月21日(火)～5月24日(金)、中国社会科学院古代史研究所(旧 中国社会科学院歴史研究所)から、卜憲群所長・王啓発研究員・戴衛紅研究員・博明妹総合処副処長を招聘し、本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。
 5月22日(水)14時～17時30分 マルチメディア演習室
 ○歴史研究所近5年来的の対外学術交流
 博明妹総合処副処長
 ○東亜簡牘文化的の伝播：以韓国出土“椋”字簡为中心
 戴衛紅研究員
 ○先秦非儒家先王観概説
 王啓発研究員
 ○先秦秦漢の民間輿論与国家治理
 卜憲群所長
 ②2019年9月16日(月)、木越康学長・浦山あゆみ副学長・井黒忍准教授が中国社会科学院古代史研究所を訪問、学術交流協定を更新し、講演を行った。
 ○中国浄土教と親鸞の他力思想
 木越康学長
 ○『大唐三蔵取経詩話』における「兔」
 浦山あゆみ副学長
 ○女真と胡里改－鉄加工技術に見る完顔部と非女真系集団との関係－
 井黒忍准教授

EBS

【公開セミナー】

- 第四期 鈴木大拙英訳『教行信証』信巻を読もう！
 講師：Michael J. Conway
 会場：響流館4階会議室

- ◇第80回
 2019年4月22日(月)14:40～16:10
- ◇第81回
 2019年5月27日(月)14:40～16:10
- ◇第82回
 2019年6月24日(月)14:40～16:10
- ◇第83回
 2019年7月22日(月)14:40～16:10

- ◇第84回
 2019年9月30日(月)14:40～16:10

西藏文献研究

【研究成果の刊行】

- ◇8月29日(休)
 『イエシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』：寺本婉雅旧蔵』松川節、伴真一郎、アイルディー・ボルマー、更蔵切主、三宅伸一郎(共編)を刊行した。寺本婉雅旧蔵の木版本の影印とその翻刻テキストからなる。翻刻テキスト内には、本仏教史のモンゴル語版である『エルデニーン・エリヘ (*Erdeni-yin Erihe*)』における対応箇所を示した。また、日本語・チベット語による解題を「序」として付した。

【研究打ち合わせ】

- ◇4月23日(火)16:20～
 場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
 内 容：2019年度の研究について
- ◇6月25日(火)16:20～
 場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
 内 容：研究業務の進捗状況の確認

ベトナム仏教研究

【研究会】

- ◇2019年4月8日(月)13:00～14:30
 (真総研ミーティングルーム)
 『禅苑集英』解読研究
- ◇2019年4月15日(月)13:00～14:30
 (真総研ミーティングルーム)
 『禅苑集英』解読研究
- ◇2019年5月13日(月)13:00～14:30
 (真総研ミーティングルーム)
 『禅苑集英』解読研究
- ◇2019年5月27日(月)13:00～14:30
 (真総研ミーティングルーム)
 『禅苑集英』解読研究
- ◇2019年6月10日(月)13:00～14:30
 (真総研ミーティングルーム)
 『禅苑集英』解読研究

◇2019年6月17日(月)13:00~14:30

(真総研ミーティングルーム)

『禪苑集英』解説研究

◇2019年7月8日(月)13:00~14:30

(真総研ミーティングルーム)

『禪苑集英』解説研究

◇2019年7月22日(月)13:00~14:30

(真総研ミーティングルーム)

『禪苑集英』解説研究

◇2019年9月30日(月)13:00~14:30

(真総研ミーティングルーム)

『禪苑集英』解説研究

清沢満之研究

【ミーティング】

◇第1回

日 時：2019年4月4日(木)16:00~17:00

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：別巻刊行に向けてのスケジュール確認
資料の読み合わせ班の検討

◇第2回

日 時：2019年4月18日(木)10:40~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：校正作業の進捗状況報告
読み合わせ作業の注意事項、凡例の確認

◇第3回

日 時：2019年4月25日(木)10:40~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：岩波書店との交渉の現状把握
新規 RA 採用に関して

◇第4回

日 時：2019年5月16日(木)10:40~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：刊行スケジュールに関して、
新規アルバイト採用に関して

◇第5回

日 時：2019年5月23日(火)10:40~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：岩波書店との刊行スケジュールの進捗報
告、及び契約に関して
編集室使用に関して

◇第6回

日 時：2019年5月30日(木)10:40~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：読み合わせ検討事項確認
別巻の解題、解説に関して

◇第7回

日 時：2019年6月6日(木)10:40~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：読み合わせの検討事項確認

◇第8回

日 時：2019年6月13日(木)10:00~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：全体会議議題確認
解説の依頼に関して

◇第9回

日 時：2019年6月20日(木)10:40~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

会 場：真宗総合研究所フリースペース

目 的：解説執筆への依頼確認
読み合わせ検討事項確認

◇第10回

日 時：2019年6月27日(木)10:40~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

会 場：真宗総合研究所編集室

目 的：各班読み合わせの進捗状況報告
特別班の編成に関して
全体会議に向けて

◇第11回

日 時：2019年7月4日(木)10:00~12:10

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

会 場：真宗総合研究所編集室

目 的：全体会議の資料作成
特別班の編成及び分担
読み合わせ検討事項確認

◇第12回

日 時：2019年7月11日(水)10:40~12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：特別班編成及び分担
読み合わせ検討事項確認

◇第13回

日 時：2019年7月18日(月)10:40~12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：読み合わせ検討事項検討
全体会議議題の最終確認

◇第14回

日 時：2019年7月25日(水)14:40~16:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：全体会議議事録確認

◇第15回

日 時：2019年8月1日(木)10:40~12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：特別班及び各班の夏季休暇中のスケジュール確認

◇第16回

日 時：2019年9月3日(火)11:00~12:00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：各班の読み合わせ作業の状況確認
読み合わせ後の入力作業進捗確認
入力作業のためのアルバイト増員

◇第17回

日 時：2019年9月10日(火)10:00~12:00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：読み合わせ作業、入力の進捗確認
注、及び目次等の作業の進捗確認

◇第18回

日 時：2019年9月13日(金)10:00~12:00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：読み合わせ検討事項確認

◇第19回

日 時：2019年9月18日(水)14:00~16:00
出席者：西本祐攝、大艸啓、澤崎瑞央
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：読み合わせ作業の完了及び入力の進捗確認
10月末入稿に向けてのスケジュール確認

◇第20回

日 時：2019年9月26日(木)16:20~17:50
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
会 場：真宗総合研究所編集室
目 的：入力の進捗確認
別巻2の読み合わせスケジュールの調整

【全体会議】

◇第1回

日 時：2019年4月10日(水)12:10~13:30
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、
福島栄寿、西尾浩二、大艸啓、浦井聡、
藤井了興
会 場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目 的：清沢班作業全体の進捗状況報告
研究計画、岩波書店との交渉、
読み合わせ班の再編、研究会に関して

◇第2回

日 時：2019年5月7日(火)18:00~19:00
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、
福島栄寿、西尾浩二、大艸啓、浦井聡、
名畑直日児、藤井了興
会 場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目 的：RA 選定
本刊オンデマンド版に関して
読み合わせ、解題、解説等の進捗状況

◇第3回

日 時：2019年6月13日(木)12:00~13:30
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、
福島栄寿、西尾浩二、大艸啓、浦井聡、
名畑直日児、藤井了興、澤崎瑞央
会 場：真宗総合研究所ミーティングルーム

目的：読み合わせ作業の進捗状況報告
別巻の解説執筆者選定

◇第4回

日時：2019年7月23日(火)18:00~19:00
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、
福島栄寿、西尾浩二、大艸啓、浦井聡、
名畑直日児、藤井了興、澤崎瑞央
会場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目的：校正作業の進捗状況報告

◇第5回

日時：2019年9月25日(水)12:00~13:00
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、西尾浩二、
大艸啓、浦井聡、藤井了興、澤崎瑞央
会場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目的：目次、凡例、解題の確認
岩波書店とのスケジュール確認
別巻2の構成確認
読み合わせ新班編成について

【出張調査】

日程：2019年6月24日(月)
場所：岩波書店(東京都千代田区)
目的：現在までの交渉内容の確認
別巻刊行にむけての予算、計画、刊行形態
等の確認
出張者：西本祐攝、大艸啓

大谷大学史資料室

【研究会参加】

◇全国大学史資料協議会西日本部会 2019年度総
会・第1回研究会
日程：2019年6月14日(金)
場所：追手門学院大学 安威キャンパス
参加者：松岡智美

◇全国大学史資料協議会西日本部会 2019年度第2
回研究会
日程：2019年7月9日(火)
場所：関西大学 千里山キャンパス 第1学舎
簡文館
参加者：松岡智美

【史料調査】

2019年9月に、学内から1件の所蔵資料に関する
問い合わせを受け、調査・報告を行った。

【展示活動】

◇2019年7月24日(水)9:00~10:00
図書館エントランス展示スペースにて「新制「大谷
大学」誕生」の展示準備

◇2019年9月20日(金)17:10~17:30
図書館エントランス展示スペースにて「新制「大谷
大学」誕生」の展示撤収

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史
資料の調査・整理や、貸出等への対応を日常業務とし
て行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの
協力を得た。ここに謝意を記す。

デジタル・アーカイブ資料室(パリ関係)

【研究会】

◇2019年9月10日(火)13:00~18:00
(於 真宗総合研究所ミーティングルーム)
講師：C. Bunchird氏(Head of Tipiṭaka Re-
search Center, Dhammachai Tipiṭaka Pro-
ject, Thailand)
S. Suchada氏(Head of Center for the
Study of Ancient Manuscripts, Dham-
machai Tipiṭaka Project, Thailand)
テーマ：「大谷貝葉」の中のパリ語とタイ語の混
淆形式で書かれた難解文章の読解

■東京分室

東京分室指定研究

【出張】

◇2019年5月18日(土)~19日(日)
出張先：東京慈恵会医科大学(国領キャンパス)
用務：第45回日本保健医療社会学会大会参加
出張者：鍾宜錚

◇2019年5月23日(木)~26日(日)
出張先：法鼓文理学院
用務：第19回国際真宗学会参加・発表
出張者：大澤絢子

◇2019年8月1日(木)~4日(日)
出張先：インドネシア・スラバヤ
用務：2019年アジア太平洋ホスピス大会(Asia
Pacific Hospice Conference)参加・発表
出張者：鍾宜錚

- ◇2019年9月12日(木)～15日(日)
出張先：台湾〔善道寺・同光同志長老教会(台北)、佛光山(高雄)、故宮博物院南分院・媽祖廟(嘉義)〕
用務：共同研究「社会的価値観における宗教の役割の解明」の一環として、台湾において仏教およびキリスト教が過去から現在に至る社会の中で果たしてきた役割と、その社会的意義の調査。
出張者：青柳英司、鍾宜錚、西村晶絵

個人研究青柳班

【出張】

- ◇2019年6月6日(木)～6月8日(土)
出張先：大谷大学
用務：真宗連合学会第66回大会参加
出張者：青柳英司
- ◇2019年7月13日(土)～7月14日(日)
出張先：大谷大学
用務：第26回真宗大谷派教学大会参加・発表
出張者：青柳英司
- ◇2019年8月22日(木)～8月24日(土)
出張先：大谷大学図書館
用務：資料調査(『教行信証』丹山本、学寮本)
出張者：青柳英司
- ◇2019年9月6日(金)～9月8日(日)
出張先：佛教大学
用務：日本印度学仏教学会第70回学術大会参加
出張者：青柳英司

個人研究大澤班

【出張】

- ◇2019年4月23日(火)～24日(水)
出張先：龍谷大学大宮図書館
用務：資料収集(写字台文庫)
出張者：大澤絢子
- ◇2019年5月23日(木)
出張先：大谷大学
用務：ジョナサン・シルク氏公開講演会(「Editing without an Ur-text」)参加
出張者：大澤絢子

- ◇2019年6月1日(土)
出張先：東洋大学
用務：第27回日本近代仏教史研究会大会参加
出張者：大澤絢子
- ◇2019年6月8日(土)～9日(日)
出張先：京都府立大学
用務：第27回「宗教と社会」学会学術大会参加
出張者：大澤絢子
- ◇2019年6月15日(土)～16日(日)
出張先：京都大学/国際日本文化研究センター
用務：第19回「仏教と近代」研究会&宗教雑誌ワークショップ第2回「雑誌メディアの近代仏教」参加・発表
「応永・永享期文化論 6月研究会」：参加・発表
出張者：大澤絢子
- ◇2019年8月5日(月)
出張先：龍谷大学大宮図書館および龍谷大学大宮学舎
用務：資料収集・龍谷大学世界仏教文化研究センター公開研究会参加・コメンテーター
出張者：大澤絢子
- ◇2019年9月14日(土)～15日(日)
出張先：帝京科学大学(千住キャンパス)
用務：第78回日本宗教学会に参加・パネル発表
出張者：大澤絢子

個人研究鍾班

【出張】

- ◇2019年7月31日(水)
出張先：インドネシア・スラバヤ
用務：インドネシア生命倫理フォーラム(Indonesia Bioethics Forum)の定期研究会に参加・発表
出張者：鍾宜錚
- ◇2019年8月6日(火)～8日(木)
出張先：早稲田大学(東京)
用務：第25回医事法国際会議に参加・発表
出張者：鍾宜錚

個人研究西村班

【出張】

◇2019年5月25日(土)～26日(日)
出張先：成城大学
用務：日本フランス語フランス文学会2019年度
春季大会への参加
出張者：西村晶絵

◇2019年8月19日(月)～20日(火)
出張先：南山大学
用務：南山大学外国語学部フランス語学科主催シ
ンポジウム「フランス近現代文学における
〈教育〉の表象」への参加・発表
出張者：西村晶絵

■一般研究出張関係

一般研究井黒班

◇2019年7月6日(土)
出張先：早稲田大学戸山キャンパス
用務：武漢大学魯西奇教授講演会 参加
出張者：井黒忍

◇2019年7月13日(土)～14日(日)
出張先：藤屋旅館
用務：第56回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ
学会）参加
出張者：井黒忍

一般研究大原班

◇2019年5月26日(日)
出張先：東京家政学院大学千代田三番町キャンパス
用務：「貧困・生活保護制度研究会」参加・報告
出張者：大原ゆい

◇2019年6月16日(日)
出張先：立教大学池袋キャンパス
用務：「日本福祉介護情報学会第20回研究大会」
参加
出張者：大原ゆい

◇2019年8月22日(木)
出張先：宅老所よりあい
用務：ソーシャルワーク専門職へのヒアリング調
査
出張者：大原ゆい

◇2019年8月24日(土)
出張先：東京家政学院大学千代田三番町キャンパス
用務：「貧困・生活保護制度研究会」参加
出張者：大原ゆい

◇2019年8月25日(日)～28日(水)
出張先：北海道釧路市、札幌市
用務：家族介護者支援に関するヒアリング調査
出張者：大原ゆい

◇2019年9月21日(土)～22日(日)
出張先：大分大学且野原キャンパス
用務：日本社会福祉学会第67回秋季大会 参加
出張者：大原ゆい

一般研究柴田班

◇2019年9月7日(土)～15日(日)
出張先：イギリス ロンドン（大英図書館、プロン
プトン墓地、大英博物館、イギリス国立公
文書館、ロンドン市内の博物館等）
用務：紋章に関する資料調査、プロンプトン墓地
における墓跡調査、市内各所の調査
出張者：柴田みゆき、杉山正治

■人事

■特別研究員

□新規採用（2019年8月30日付）

*浦井 聡
現職：任期制助教
研究期間：2019年8月30日～2021年3月31日
研究課題：田辺哲学の中期から後期への発展の解明
——武内義範との交流を踏まえて

*高井 龍
現職：任期制助教
研究期間：2019年8月30日～2021年3月31日
研究課題：仏教講釈文献の利用と説話の発展に関す
る写本学的研究—敦煌文献を中心に—

*鎌田 智恵
現職：本学非常勤講師
研究期間：2019年8月30日～2021年3月31日
研究課題：中世前期の飛鳥井家における顕昭の著作
の受容の研究

□解任（2019年9月30日付）
田鍋 良臣

研 究 所 報 第 75 号

2020 年 2 月 1 日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp